

審査意見への対応を記載した書類（8月）

（目次）メディア表現研究科 メディア表現専攻（D）

【大学等の設置の趣旨・必要性】

1. <カリキュラム・ポリシーの内容やディプロマ・ポリシーとの整合性が不明確>
カリキュラム・ポリシーは大学設置の趣旨等が混在しているほか、教育課程の編成方針や教育内容・方法が記載されておらず、適切な記載内容になっていない。また、ディプロマ・ポリシーとの整合性も不明確であるので、それぞれ適切に改めること。（是正事項）・・ 1
2. <アドミッション・ポリシーの内容や入試選抜方法等の整合性が不明確>
アドミッション・ポリシーは本来定められるべき知識・能力等の記載がないため、適切に改めること。また、「様々な形態の芸術表現を通して、新しい文化の創造を目指し、社会へ新たな価値を提示する」旨の記載があるが、当該項目を論述・口頭試問による入試選抜でどのように測定するのか、制作物の評価を含めるのかなども含め、具体的に説明すること。さらに、日本語を母語としない者への対応について言及がないため、入試選抜及び入学後の履修指導における語学能力を踏まえた対応、入学後の学修支援等が適切に構想されているのかなどについても明らかにすること。（是正事項）・・・・・・ 5
3. <入試選抜方法や教育課程が十分か不明確>
入学者資格においては、幅広い出願資格を認めており、多様な学生の入学が想定されるが、入学者選抜における基礎的な能力の確保や入学後の対応等が不明確なので、具体的に説明すること。（是正事項）・・ 8
4. <既設課程との関係が不明確>
本課程は、既設の修士課程を基礎として設置し、既存の領域を横断しながら再組織化し、新たな研究領域を開いていくとしているが、既存の修士課程の研究領域体系からどのように展開していくのか不明確なので、より詳細に説明すること。（改善事項）・・ 10
5. <学位名称が適切か不明確>
学位名称を「博士(メディア表現)」としているが、学位名称として「メディア表現」を用いる趣旨や国際通用性について具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・ 12

【教育課程等】

6. <養成する人材像やディプロマ・ポリシーに対応した教育課程となっているか不明確>
養成する人材像・ディプロマ・ポリシーの説明において言及されている「実務家」の養成のためには、例えば知的財産保護など法制度等の実務に関する知見も必要と考えられるが、必要な履修内容が用意されているか不明確である。具体的に説明するか、適切に改めること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
7. <授業科目の内容が不明確>
授業科目について、授業計画の内容がほとんど変わらず、授業科目間での履修内容の差異が不明確なもの(例:「プロジェクト研究 I」「プロジェクト研究 II」)や、通年の授業科目であるが15回分の授業計画しか示されていないなど具体的な開講形態が不明確なもの(「メディア表現特別研究 I」「メディア表現特別研究 II」「メディア表現特別研究 III」)があるため、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
8. <社会人学生への配慮が不明確>
社会人学生の入学についても言及されているが、社会人学生への履修指導上の配慮について明確に説明すること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確>
研究指導・学位審査について、以下の点が不明確であるので、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。
- (1)博士論文の質保証に必要な審査体制を構築する旨記載があるが、審査水準を維持するためにどのような工夫を行うのか。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- (2)主研究指導教員になることができる教員は、どこまでの範囲なのか。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
- (3)副指導研究教員2名が博士論文審査に含まれるとあるが、公平・公正性等をどのように担保するか。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- (4)審査対象を「博士論文『等』』としているが、論文以外に何を対象とするのか。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
- (5)制作物も評価対象とする場合、論文との関係や、制作物をどのように審査するのか。

(是正事項)	27
(6)博士論文提出要件として「認知された学術論文誌」等が定められているが、認知されているかどうかの基準が不明確である。(是正事項)	29
(7)博士論文の全文や要旨・審査結果の公表等についての、規程等が準備されているのか。(是正事項)	32
10. <チームティーチングの方針が不明確>	
「プロジェクト研究科目」などでチームティーチングにより教育・研究を行うとされているが、博士後期課程において複数教員が専門的な指導を実施することは複数の指導教員の決定基準や綿密な教員間のすり合わせが必要と考えられる。どのような方法で実践され、どのような効果を意図しているのか具体的に説明すること。(改善事項)	33

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

1. <カリキュラム・ポリシーの内容やディプロマ・ポリシーとの整合性が不明確>
カリキュラム・ポリシーは大学設置の趣旨等が混在しているほか、教育課程の編成方針や教育内容・方法が記載されておらず、適切な記載内容になっていない。また、ディプロマ・ポリシーとの整合性も不明確であるので、それぞれ適切に改めること。

(対応)

カリキュラムポリシーに大学設置の趣旨等が混在していたほか、教育課程の編成方針や教育内容・方法が記載されていなかったことから、審査意見を踏まえ、カリキュラムポリシーと教育課程の編成方針について整理を行い、記載内容を改める。カリキュラムポリシーについては、ディプロマポリシーとの整合性を取るとともに教育課程編成の考え方として記載内容を改める。また、カリキュラムポリシーの前に教育課程編成・実施方針として、「建学の理念に基づき、科学技術と哲学・思想的視野をとまなう新しい文化を創造するさらなる高度な表現者の育成を目標とし、その目標のために授業を編成するとともに研究指導をおこなう。」を加える。なお、カリキュラムポリシーの内容を改めるとともにディプロマポリシーとカリキュラムポリシーの整合性を明確にするため、ディプロマポリシー全体の内容は維持したまま、ディプロマポリシーの記載内容について一部組換え、また文言を加筆した。

教育課程編成の考え方が明確になるようカリキュラムポリシーを以下のように整理した。

- 1) 専門性を有しながら自立して研究活動を推進する研究遂行力を養い、質の高いメディア表現へ向けた研究方法を獲得するため「研究基礎科目」を設置する。
- 2) 研究領域によらず様々な分野を専門とする人々へ積極的に関わり合い、領域横断しながら、その交流の中から生み出される「新しい知」の在り方を身につけ、プロジェクトの企画から実践まで通して実行するための能力を養うため「プロジェクト研究科目」を設置する。
- 3) 高い倫理性と強い責任感を意識し、メディア表現に関する研究実践から導かれた成果を広く社会へ発信し、その成果を論文へまとめるため「特別研究科目」を設置する。

またカリキュラムポリシーとディプロマポリシーとの整合性が不明確であることから、ディプロマポリシーを次のように改めた。

- 1) 専門性を有しながら科学的知性と芸術的感性を融合し、自立した教育研究者・芸術家・実務家として、自立して研究活動を推進する研究遂行力を身に付けたか。
- 2) 研究領域によらず様々な分野を専門とする人々へ積極的に関わり合い、領域横断しながら、その交流の中から生み出される「新しい知」の在り方を身につけ、プロジェクトの企画から実践まで通して実行することができたか。
- 3) 高い倫理性と強い責任感を意識し、研究が現代社会の諸課題に対する応答としての成果

を得、メディア表現に関する研究実践から導かれた理論化・体系化の成果を論文へまとめ、それら成果を広く社会へ発信することができたか。

「設置の趣旨等を記載した書類」を以下のとおり修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(7 ページ)</p> <p>4. ディプロマポリシー</p> <p>建学の理念に基づき、科学技術と哲学・思想的視野をともなう新しい文化を創造するさらなる高度な表現者の育成を目標とし、その目標のために編成されたカリキュラムにおいて、所定の単位を取得することに加え、論文審査、及び最終試験に合格した学生に修了を認定し、学位を授与する。</p> <p>1) <u>専門性を有しながら科学的知性と芸術的感性を融合し、自立した教育研究者・芸術家・実務家として、自立して研究活動を推進する研究遂行力を身に付けたか。</u></p> <p>2) <u>研究領域によらず様々な分野を専門とする人々へ積極的に関わり合い、領域横断しながら、その交流の中から生み出される「新しい知」の在り方を身につけ、プロジェクトの企画から実践まで遂行することができたか。</u></p> <p>3) <u>高い倫理性と強い責任感を意識し、研究が現代社会の諸課題に対する応答としての成果を得、<u>メディア表現に関する研究実践から導かれた理論化・体系化の成果を論文へまとめ、それら成果を広く社会へ発信することができたか。</u></u></p>	<p>(7 ページ)</p> <p>4. ディプロマポリシー</p> <p>建学の理念に基づき、科学技術と哲学・思想的視野をともなう新しい文化を創造するさらなる高度な表現者の育成を目標とし、その目標のために編成されたカリキュラムにおいて、所定の単位を取得することに加え、論文審査、及び最終試験に合格した学生に修了を認定し、学位を授与する。</p> <p>・専門性を有しながら科学的知性と芸術的感性を融合し、自立した教育研究者・芸術家・実務家として、プロジェクトの企画から実践まで通して実行することができたか。</p> <p>・研究領域によらず様々な分野を専門とする人々へ積極的に関わり合い、領域横断しながら、その交流の中から生み出される「新しい知」の在り方を身につけ、それらを理論化・体系化し論文へまとめることができたか。</p> <p>・高い倫理性と強い責任感を意識し、研究が現代社会の諸課題に対する応答としての成果を得、それら成果を広く社会へ発信することができたか。</p>
<p>(11 ページ)</p> <p>(2) <u>教育課程の編成・実施の方針</u></p> <p>本課程は、「専攻分野に係る学術の理論及び</p>	<p>(11 ページ)</p> <p>(2) 教育課程の編成・実施の方針(カリキュラムポリシー)</p>

<p>応用を教授研究して、その深奥をきわめ、情報社会の新しい在り方を創造的に開拓する「高度な表現者」としての資質を備えた人材を養成するとともに、学術文化の向上、発展及び産業の振興に寄与することを目的とする。」(情報科学芸術大学院大学学則第1章第1条) ことを教育・研究の目的としている。</p> <p>博士前期課程(修士)では、今まで芸術・学術・産業・生活などの社会の営みにおける事象から、最先端の科学技術の領域に及ぶまで幅広い関心のもとで、芸術的な表現と技術的な知識とを統合するための視点を持ち、メディアの抱える様々な問題点を多様な視点から捉え、批評しながら、「新しい表現」を生み出すための積極的な姿勢を教授してきた。また、大学院として時流にとらわれない純粋な学術的探求、すなわち制作・研究活動として、学外との積極的な交流を踏まえた「プロジェクト」を通じて、公共性や産業を含む社会と関わる「表現」を探究する実践力を養成している。</p> <p><u>建学の理念に基づき、科学技術と哲学・思想的視野をともなう新しい文化を創造するさらなる高度な表現者の育成を目標とし、その目標のために授業を編成するとともに研究指導をおこなう。</u></p> <p><u>(3) カリキュラムポリシー</u></p> <p><u>本課程の教育目的達成へ向け教育課程編成等の考え方を以下にカリキュラムポリシーとして示す。</u></p> <p><u>1) 専門性を有しながら自立して研究活動を推進する研究遂行力を養い、質の高いメディア表現へ向けた研究方法を獲得するた</u></p>	<p>本課程は、「専攻分野に係る学術の理論及び応用を教授研究して、その深奥をきわめ、情報社会の新しい在り方を創造的に開拓する「高度な表現者」としての資質を備えた人材を養成するとともに、学術文化の向上、発展及び産業の振興に寄与することを目的とする。」(情報科学芸術大学院大学学則第1章第1条) ことを教育・研究の目的としている。</p> <p>博士前期課程(修士)では、今まで芸術・学術・産業・生活などの社会の営みにおける事象から、最先端の科学技術の領域に及ぶまで幅広い関心のもとで、芸術的な表現と技術的な知識とを統合するための視点を持ち、メディアの抱える様々な問題点を多様な視点から捉え、批評しながら、「新しい表現」を生み出すための積極的な姿勢を教授してきた。また、大学院として時流にとらわれない純粋な学術的探求、すなわち制作・研究活動として、学外との積極的な交流を踏まえた「プロジェクト」を通じて、公共性や産業を含む社会と関わる「表現」を探究する実践力を養成している。</p> <p>次の3つのカリキュラムポリシーとして掲げるものである。</p> <p>1) メディア表現と社会との関係性を踏まえながら、未来に対しての責任・倫理を意識し、科学的知性と芸術的感性を駆使しながら、新たな表現や課題解決へアプローチしていく「研究遂行力」を養う。</p> <p>2) 領域横断的な社会課題に対してアプローチするため、専門領域を横断し、自身の専門領域へと還元する「領域横断力」、多様な人々と協同していくための「実践力」を養う。</p>
---	---

<p>め「研究基礎科目」を設置する。</p> <p>2) 研究領域によらず様々な分野を専門とする人々へ積極的に関わり合い、領域横断しながら、その交流の中から生み出される「新しい知」の在り方を身につけ、プロジェクトの企画から実践まで通して実行するための能力を養うため「プロジェクト研究科目」を設置する。</p> <p>3) 高い倫理性と強い責任感を意識し、メディア表現に関する研究実践から導かれた成果を広く社会へ発信し、その成果を論文へまとめるため「特別研究科目」を設置する。</p>	<p>3) メディア表現に関する研究実践から導かれた理論化・体系化の成果を、様々な場面で社会に広く公開していく「発信力」を養う。</p> <p>このカリキュラムポリシーを基に、各科目を体系的に配置し、以降に記載する教育課程の編成をおこなうものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「研究基礎科目」は、研究能力をさらに発展させるため、自立して研究活動を推進できる能力を養い、新たな表現拡張と理論化・体系化につなげ、質の高いメディア表現へ向けた研究方法を獲得する科目である。 ・「プロジェクト研究科目」は、新たな表現拡張と理論化・体系化につながる中心的科目として配置し、博士論文作成に向けた実践的研究を展開する。プロジェクトベースドラーニング（PBL）とチームティーチングによる、開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。 ・「特別研究科目」は、研究テーマに基づく博士論文及び研究作品（研究作品については、研究領域により必要な場合に限る。以下「博士論文」という。）をまとめるための科目である。
---	--

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

2. <アドミッション・ポリシーの内容や入試選抜方法等の整合性が不明確>

アドミッション・ポリシーは本来定められるべき知識・能力等の記載がないため、適切に改めること。また、「様々な形態の芸術表現を通して、新しい文化の創造を目指し、社会へ新たな価値を提示する」旨の記載があるが、当該項目を論述・口頭試問による入試選抜でどのように測定するのか、制作物の評価を含めるのかなども含め、具体的に説明すること。さらに、日本語を母語としない者への対応について言及がないため、入試選抜及び入学後の履修指導における語学能力を踏まえた対応、入学後の学修支援等が適切に構想されているのかなどについても明らかにすること。

(対応)

アドミッションポリシーに、受け入れる学生に求める知識や能力等の記載が無かったことから、審査意見を踏まえ、「本課程では、自らの専門領域とは異なる他の分野の知識や技術にも関心を持ち、多様な分野の人とコミュニケーションを取り協働することができる能力と、領域を横断しながら自らの考えをまとめ作品を制作できる能力を礎に、メディア表現の学術的研究の先導者の養成に取り組むものである。」ことをアドミッションポリシーに明記し、アドミッションポリシーの記載を修正する。

次に、「様々な形態の芸術表現を通して、新しい文化の創造を目指し、社会へ新たな価値を提示する」ことの測定について説明する。入試選抜方法について、提出書類に志望理由書と研究計画書、ならびに学会論文やポートフォリオなど制作物に関する資料、修士論文を合わせ、さらに口頭試問により総合的に判断するものである。「様々な形態の芸術表現を通して、新しい文化の創造を目指し、社会へ新たな価値を提示する」ことの測定については、これまでどのような表現活動をおこなったか、その表現活動により社会に対してどのような価値を提示できたと考えているかを、これらの書類と口頭試問の中から読み取り判断する。詳細については改善事項3を参照ください。

次に、日本語を母語としない者への対応について説明する。日本語を母語としない者への対応は、これまで博士前期課程にて日本語能力試験 (N2) 以上を必要とした入試を実施している。入学後の履修指導は、外国人教職員が在籍する留学生を支援する体制があり、外国人教職員による支援と、英語による履修冊子を用意して対応している。また学修支援として英語により実施する科目もあり、レポートや修士論文も英語による提出を認めている。本課程では、日本語を母語としない受験者について、博士前期課程よりも高い日本語能力試験 (N1) または日本留学試験 (日本語の読解+聴解・聴読解で 280 点以上および記述で 35 点以上) を出願資格とする。また博士前期課程同様に、履修指導と学修支援を実施する。

よって「設置の趣旨等を記載した書類」を以下のとおり修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(24 ページ)</p> <p>2. アドミッションポリシー</p> <p>本課程では、自らの専門領域とは異なる他の分野の知識や技術にも関心を持ち、多様な分野の人とコミュニケーションを取り協働することができる能力と、領域を横断しながら自らの考えをまとめ作品として制作できる能力を礎に、メディア表現の学術的研究の先導者の養成に取り組むものである。この目的を達成するために本課程が求める学生像は次のとおりとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らの専門領域の知識 を生かしながら他分野への横断的な探求を試み、メディア表現の理論・体系化を探求していく人。 ・様々な形態の芸術表現を通して、新しい文化の創造を目指し、社会へ新たな価値を提示する人。 ・情報やコミュニケーションに新たな形を与え、地域や社会へ提案し、心豊かな社会の実現を目指しながら、メディア表現の理論・体系化を担っていく意欲のある人 	<p>(24 ページ)</p> <p>2. アドミッションポリシー</p> <p>メディア表現の学術的研究を先導し、新しい文化を創造するとともに、社会において新たな価値の創出に貢献することを目指し、メディア表現及び社会において成果を発信していく「高度な表現者」となる教育研究者・芸術家および実務家の養成に取り組むものである。この目的を達成するために本課程が求める学生像は次のとおりとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らの専門領域の知識 を生かしながら他分野への横断的な探求を試み、メディア表現の理論・体系化を探求していく人。 ・様々な形態の芸術表現を通して、新しい文化の創造を目指し、社会へ新たな価値を提示する人。 ・情報やコミュニケーションに新たな形を与え、地域や社会へ提案し、心豊かな社会の実現を目指しながら、メディア表現の理論・体系化を担っていく意欲のある人
<p>(25 ページ)</p> <p>3. 出願資格</p> <p>a 修士の学位または専門職学位を有する者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者)</p> <p>b 外国において、修士の学位や専門職学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p>	<p>(25 ページ)</p> <p>3. 出願資格</p> <p>a 修士の学位または専門職学位を有する者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者)</p> <p>b 外国において、修士の学位や専門職学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p>

<p>c 外国の学校が行う通信教育を我が国において履修し、修士の学位や専門職学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p> <p>d 我が国において、外国の大学院相当として指定した外国の学校の課程(文部科学大臣指定外国大学(大学院相当)日本校)を修了し、修士の学位や専門職学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p> <p>e 国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p> <p>f 大学等を卒業し、大学、研究所等において 2 年以上研究に従事した者で、大学院において、修士の学位を有する者と同等の学力があると認めた者(平成元年文部省告示第 118 号)</p> <p>g 本学大学院において、個別の入学資格審査により認めた令和 3 年 3 月 31 日までに 24 歳に達する者</p> <p><u>日本語を母語としない場合、上記出願資格と合わせて以下いずれかに該当している必要がある。</u></p> <p><u>①日本学生支援機構が運営する「日本留学試験(EJU)」において、「日本語」の【読解+聴解・聴読解(各 200 点、合計 400 点)】で 280 点以上および【記述(50 点)】で 35 点以上を取得した者。</u></p> <p><u>②国際交流基金・日本国際教育支援協会が運営する「日本語能力試験(JLPT)」において、N1 に合格した者。</u></p>	<p>c 外国の学校が行う通信教育を我が国において履修し、修士の学位や専門職学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p> <p>d 我が国において、外国の大学院相当として指定した外国の学校の課程(文部科学大臣指定外国大学(大学院相当)日本校)を修了し、修士の学位や専門職学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p> <p>e 国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び令和 3 年 3 月 31 日までに授与される見込みの者</p> <p>f 大学等を卒業し、大学、研究所等において 2 年以上研究に従事した者で、大学院において、修士の学位を有する者と同等の学力があると認めた者(平成元年文部省告示第 118 号)</p> <p>g 本学大学院において、個別の入学資格審査により認めた令和 3 年 3 月 31 日までに 24 歳に達する者</p>
---	--

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

3. <入試選抜方法や教育課程が十分か不明確>

入学者資格においては、幅広い出願資格を認めており、多様な学生の入学が想定されるが、入学者選抜における基礎的な能力の確保や入学後の対応等が不明確なので、具体的に説明すること。

(対応)

審査意見を踏まえ、入学者資格において、幅広い出願資格を認めており、多様な学生の入学が想定される。よって、基礎的な能力の確保については、入学者選抜において、博士前期課程において修得した基礎的な能力として、作品を制作する能力や協働する能力を求められることとなる。そこで提出書類に志望理由書と研究計画書、修士論文、ならびにポートフォリオなど制作物の資料や、学会論文を合わせ、さらに口頭試問により総合的に判断し、基礎的な能力を確保する。

入学後の対応として、基礎力が不足する場合、特別研究での個別指導や、博士前期課程の授業を受講するなどし、基礎的な能力を補う。なお、博士前期課程の授業の受講については、修了要件単位には含まない。

よって「設置の趣旨等を記載した書類」を以下のとおり修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(17 ページ) 1. 教育方法、履修指導上の特色 (1) 体系的な研究指導科目 学生が自身の研究内容に応じた研究遂行に係る基礎を養いながら、段階的に研究指導教員の指導による研究テーマの考察が体系的に進められるように科目の配当年次を設定する。 (2) 複数教員による指導体制 (チームティーチング) 研究指導体制は、基本的に学生 1 人に研究指導教員 1 人が担当する。学生の研究内容に従い、指導を担当する教員と連携しながら、2 人の副研究指導教員を含めた複数教	(17 ページ) 1. 教育方法、履修指導上の特色 (1) 体系的な研究指導科目 学生が自身の研究内容に応じた研究遂行に係る基礎を養いながら、段階的に研究指導教員の指導による研究テーマの考察が体系的に進められるように科目の配当年次を設定する。 (2) 複数教員による指導体制 (チームティーチング) 研究指導体制は、基本的に学生 1 人に研究指導教員 1 人が担当する。学生の研究内容に従い、指導を担当する教員と連携しながら、2 人の副研究指導教員を含めた複数教

<p>員によるチームを構成し学生の指導体制をつくる。</p> <p>(3) 博士前期課程授業科目の聴講</p> <p>本学の博士前期課程を修了していない社会人学生や留学生などにおいて、<u>基礎的能力の補完的な学び</u>に対応するため、本課程の学生については、教授会の議を経て、博士前期課程の授業科目の聴講を認める。</p>	<p>員によるチームを構成し学生の指導体制をつくる。</p> <p>(3) 修士課程授業科目の聴講</p> <p>学生の補完的な学びに対応するため、本課程の学生については、教授会の議を経て、博士前期課程の授業科目の聴講を認める。</p>
<p>(25 ページ)</p> <p>5. 選抜方法</p> <p>選抜方法は、本課程の教育を受けるにふさわしい能力と<u>適性</u>として、<u>自らの専門領域とは異なる他の分野の知識や技術に関心を持ち、多様な分野の人とコミュニケーションを取り協働することができる能力と、領域を横断しながら自らの考えをまとめ作品を制作できる能力を</u>求める。<u>それらを備えた人材を合理的に判断するために、学際的なテーマに基づく面接を含む口頭試問により実施する。</u>なお受験者には、入学願書に志望理由書、研究計画書、修士論文を書類添付させることとする。<u>また、学会論文やポートフォリオ等の成果を添付させ、これまでの研究・表現活動について、これらの出願書類をもとに面接を含む口頭試問を実施し、総合的に判断する。</u></p> <p>また、本課程への入学前に研究指導教員から自身の研究計画について助言を受ける機会を提供するため、「入学前の研究指導相談」を実施し、研究・修学に関する相談を受け付ける。</p>	<p>(25 ページ)</p> <p>5. 選抜方法</p> <p>選抜方法は、本課程の教育を受けるにふさわしい能力と適性を備えた人材を合理的に判断するために、学際的なテーマに基づく面接を含む口頭試問により実施する。なお受験者には、入学願書に志望理由書、研究計画書等を書類添付させることとし、これらの出願書類をもとに面接を含む口頭試問を実施し、総合的に判断する。</p> <p>また、本課程への入学前に研究指導教員から自身の研究計画について助言を受ける機会を提供するため、「入学前の研究指導相談」を実施し、研究・修学に関する相談を受け付ける。</p>

(改善事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

4. <既設課程との関係が不明確>

本課程は、既設の修士課程を基礎として設置し、既存の領域を横断しながら再組織化し、新たな研究領域を開いていくとしているが、既存の修士課程の研究領域体系からどのように展開していくのか不明確なので、より詳細に説明すること

(対応)

審査意見を踏まえ、博士前期課程では既存の分野を基に構成するのではなく、「アート」「デザイン」「エンジニアリング」「コミュニケーション」の分野を横断することを前提とし、その指針として「共生」「共創」「共有」を掲げる。「共生」領域ではモノとメディアの創出・設計・発信を目指し、「共創」領域ではメディアの活用・改変・編集をおこない、「共有」領域ではメディアを取り巻くイベントやパフォーマンスを分析・計画・実行する。本課程ではこれらの研究を再構成する上で、プロジェクトの企画から実践までを通して研究遂行能力を身に付けることを重視し、メディア表現の実践を理論化・体系化し論文にまとめ、社会へ発信することを目指す。

これについて不明確であるため、「設置の趣旨等を記載した書類」を以下のとおり修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(12 ページ) (2) 分野の考え方 本学はこれまでの研究領域や、縦割りに孤立した従来型の大学研究室とは異なる、プロジェクトベースドラーニング (PBL) やチームティーチングによる、開かれた活動の場の中で、相互に協同、交流を図りながら、教育・研究を進めてきた。前述の理念に基づくならば、細分化され分析的な視点に立つ従来の領域編成よりも、本学の特徴である学際的な分野へのアプローチを最も適切におこなう為には、細分化された領域同士の重なり合いを、むしろ積極的に設定することが重要である。博士前期課程では既存の分野を基に構成するのではなく、「アート」「デザイン」「エンジニアリング」「コミ	(12 ページ) (2) 分野の考え方 本学はこれまでの研究領域や、縦割りに孤立した従来型の大学研究室とは異なる、プロジェクトベースドラーニング (PBL) やチームティーチングによる、開かれた活動の場の中で、相互に協同、交流を図りながら、教育・研究を進めてきた。前述の理念に基づくならば、細分化され分析的な視点に立つ従来の領域編成よりも、本学の特徴である学際的な分野へのアプローチを最も適切におこなう為には、細分化された領域同士の重なり合いを、むしろ積極的に設定することが重要である。そのため、本課程の教育・研究分野は、既存の分野を基に構成するのではなく、「アート」「デザイン」「エ

<p>「コミュニケーション」の分野を横断することを前提とし、その指針として「共生」「共創」「共有」を掲げる。「共生」領域ではモノとメディアの創出・設計・発信を目指し、「共創」領域ではメディアの活用・改変・編集をおこない、「共有」領域ではメディアを取り巻くイベントやパフォーマンスを分析・計画・実行する。本課程ではこれらの研究を再構成する上で、プロジェクトの企画から実践までを通して研究遂行能力を身に付けることを重視し、メディア表現の実践を理論化・体系化し論文にまとめ、社会へ発信することを目指す。</p>	<p>「エンジニアリング」「コミュニケーション」の領域横断を前提とし、異なる既存の学術分野の知見や洞察を、相互関係を持ちながら実践し俯瞰的な活動形態をとる「メディア表現」を分野とする。</p>
--	--

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

5. <学位名称が適切か不明確>

学位名称を「博士(メディア表現)」としているが、学位名称として「メディア表現」を用いる趣旨や国際通用性について具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

2001年開学以来、博士前期課程では学位を「修士(メディア表現)」として、プロジェクトを中心に、高度な専門性を持つ教員と学生が領域を横断しながら複雑な課題に取り組む研究活動をおこなってきた。

本課程研究科名については、その博士前期課程の研究科名である「メディア表現研究科」を用い、専攻名も「メディア表現専攻」とする。専攻名については、これまで説明したように、本学が標榜するアートの統合力によって現代社会が直面する問題に対し、情報社会の新しい在り方を創造的に開拓してゆく取り組みをメディア表現研究と位置付けていることに基づく。したがって、「メディア」「表現」を基本概念として教育課程を編成し、授与する学位の名称を「博士(メディア表現)」とする。

また、学位の英文名称は、「Doctor of Philosophy in Media Creation」と表記する。「Doctor of Philosophy」は、諸分野における博士の学位を示すものとして、諸外国において一般的に使用されており学術的にも広く認知されている。この学位のレベル、分野に、専攻名の英名「Media Creation」を合わせて示すこととする。

なお、以上については、日本学術会議による報告「学士の学位に付記する専攻分野の名称の在り方について」(平成26年(2014年)9月17日)で示されている学位の英文表記に関しての基本的考え方に合致するものである。

国内は基より、国外においても積極的に活動をおこない、世界的イベントとしてオーストリア・リンツで毎年9月に開かれる世界最大のメディアアートの祭典であるアルスエレクトロニカでは、例年、教員・学生・卒業生が受賞・出展し、さらに審査員を務めるなどしている。さらに2004年には、同祭典において欧州以外の教育機関としては初めてキャンパス展示に招待され、大規模な学校紹介の大規模展示を実施した。地元紙のみならずニューヨークタイムズをはじめ欧米のジャーナリズムにも大きく取り上げられ、専門家からも高い評価を得た。また現代美術イベント等では、例えばベネチアビエンナーレにて卒業生が日本館展示をおこなっている。(資料1) 国際学会では、ISEA(International Symposium on Electronic Art)やACM(Association for Computing Machinery)、IAMCR(International Association for Media and Communication research)、あるいは国際イベントとしてSXSW(South by Southwest)などにて発表し、国際的な活動が認知されている。

また、これまで交換留学制度を以下のように展開し、継続して交換留学もおこなわれている。

- ・リンツ美術工芸大（オーストリア）2005年より現在継続中
- ・南カルフォルニア大学（アメリカ）
- ・ダートマス大学（アメリカ）
- ・レイベンスボーン・デザイン通信大学（イギリス）
- ・シュリシティー芸術デザイン技術学校（インド）

Artist in Residence 制度（2007年まで）では、海外からアーティストを招聘するプログラムでは、国際的な取り組みとして研究者らからも高い評価を得ている。（資料2）

以上のことから、本学が取り組んできた「メディア表現」や「メディア表現研究科」という研究科名称、あるいは「修士（メディア表現）」という学位名称については、国際的にも認知されており、本課程の「博士（メディア表現）」についても国際通用性があるものと考え

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>（10 ページ）</p> <p>II 研究科の構成</p> <p>1. 課程名・学位の名称等</p> <p>本学は、メディア表現研究科修士課程を設置しており、本課程は、当該研究科修士課程を基礎として設置するものである。</p> <p>研究科及び専攻の名称は、領域を横断した表現の研究という目的にふさわしい名称を以下のとおり設定する。</p> <p>(1) 課程</p> <p>メディア表現研究科博士後期課程 (Graduate School of Media Creation)</p> <p>(2) 専攻</p> <p>メディア表現専攻 (Course of Media Creation)</p> <p>(3) 修業年限・入学定員</p> <p>3年、入学定員3人</p> <p>(4) 学位</p> <p>博士（メディア表現）(Doctor of</p>	<p>（10 ページ）</p> <p>II 研究科の構成</p> <p>1. 課程名・学位の名称等</p> <p>本学は、メディア表現研究科修士課程を設置しており、本課程は、当該研究科修士課程を基礎として設置するものである。</p> <p>研究科及び専攻の名称は、領域を横断した表現の研究という目的にふさわしい名称を以下のとおり設定する。</p> <p>(1) 課程</p> <p>メディア表現研究科博士後期課程 (Graduate School of Media Creation)</p> <p>(2) 専攻</p> <p>メディア表現専攻 (Course of Media Creation)</p> <p>(3) 修業年限・入学定員</p> <p>3年、入学定員3人</p> <p>(4) 学位</p> <p>博士（メディア表現）(Doctor of</p>

<p>Philosophy in Media Creation)</p> <p>2. 当該名称とする理由</p> <p>2001年の開学以来、博士前期課程では学位を「修士（メディア表現）」として、プロジェクトを中心に、高度な専門性を持つ教員と学生が領域を横断しながら複雑な課題に取り組む研究活動をおこなってきた。</p> <p>本課程研究科名については、その博士前期課程の研究科名である「メディア表現研究科」を用い、専攻名も「メディア表現専攻」とする。専攻名については、これまで説明したように、本学が標榜するアートの統合力によって現代社会が直面する問題に対し、情報社会の新しい在り方を創造的に開拓してゆく取り組みをメディア表現研究と位置付けていることに基づく。したがって、「メディア」「表現」を基本概念として教育課程を編成し、授与する学位の名称を「博士（メディア表現）」とする。</p> <p>また、学位の英文名称は、「Doctor of Philosophy in Media Creation」と表記する。</p> <p>「Doctor of Philosophy」は、諸分野における博士の学位を示すものとして、諸外国において一般的に使用されており学術的にも広く認知されている。この学位のレベル、分野に、専攻名の英名「Media Creation」を合わせて示すこととする。</p>	<p>Philosophy in Media Creation)</p>
--	---------------------------------------

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

6. <養成する人材像やディプロマ・ポリシーに対応した教育課程となっているか不明確
>
養成する人材像・ディプロマ・ポリシーの説明において言及されている「実務家」の養成のためには、例えば知的財産保護など法制度等の実務に関する知見も必要と考えられるが、必要な履修内容が用意されているか不明確である。具体的に説明するか、適切に改めること。

(対応)

審査意見を踏まえ、「実務家」の養成のためには知的財産保護など法制度等の実務に関する知見も必要と考えることから、新たに授業科目「知的財産権特論」を設け、実務家養成へ対応する。

以下を修正した。

- ・ 設置の趣旨等を記載した書類
- ・ シラバス
- ・ 概要図
- ・ 履修モデル
- ・ 時間割
- ・ 別記様式第2号(その2の1) 教育課程等の概要
- ・ 別記様式第2号(その3の1) 授業科目の概要

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(14 ページ) 4. 科目区分及び授業科目の特色及び履修方法 (1) 構成・単位数 ①研究基礎科目 「研究基礎科目」には、学生が自身の研究を進める際に、研究テーマを問わず共通して必要となる調査方法、分析方法、評価方法等を修得することを目的とした、理論化・体系化の基礎となる科目として「メディア表現研究 I」(2 単位)と「メディア表現研	(14 ページ) 4. 科目区分及び授業科目の特色及び履修方法 (1) 構成・単位数 ①研究基礎科目 「研究基礎科目」には、学生が自身の研究を進める際に、研究テーマを問わず共通して必要となる調査方法、分析方法、評価方法等を修得することを目的とした、理論化・体系化の基礎となる科目として「メディア表現研究 I」(2 単位)と「メディア表現研

<p>究Ⅱ」(2単位)を設ける。</p> <p>「メディア表現研究Ⅰ」では、論文例や研究方法、評価方法等を示しながら、論文執筆に求められる研究の枠組みなども含め、3年間の研究活動を俯瞰する科目として位置付ける。</p> <p>「メディア表現研究Ⅱ」では、それぞれの研究テーマを踏まえながら、具体的な事例を対象とした仮説の設定、収集、解析、理論の検証、考察の手法等を学び、自身の論文作成に有益な研究方法構築の全般を修得する。</p> <p>博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、各自のテーマに基づいて進められる研究視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる「研究遂行力」を養い、ならびに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を探求する。また、論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を修得する。なお、「メディア表現研究Ⅰ」では領域横断的に相互に深く関連するものであることから、多様な事例の修学を狙い教員がオムニバス方式にて開講する。</p> <p>さらに、<u>社会の課題を事業により解決しようとする実務家へ進むために必要となる基礎知識として「知的財産権特論」(1単位)を設ける。地域の公的機関や民間企業の研究部門等において、多面的な展開において必要となる知的財産権全般の知識を習得し、研究・制作活動と知的財産との関連や、知的財産権の取得・活用について理解を深める。</u></p>	<p>究Ⅱ」(2単位)を設ける。</p> <p>「メディア表現研究Ⅰ」では、論文例や研究方法、評価方法等を示しながら、論文執筆に求められる研究の枠組みなども含め、3年間の研究活動を俯瞰する科目として位置付ける。</p> <p>「メディア表現研究Ⅱ」では、それぞれの研究テーマを踏まえながら、具体的な事例を対象とした仮説の設定、収集、解析、理論の検証、考察の手法等を学び、自身の論文作成に有益な研究方法構築の全般を修得する。</p> <p>博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、各自のテーマに基づいて進められる研究視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる「研究遂行力」を養い、ならびに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を探求する。また、論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を修得する。なお、「メディア表現研究Ⅰ」では領域横断的に相互に深く関連するものであることから、多様な事例の修学を狙い教員がオムニバス方式にて開講する。</p>
<p>(15 ページ)</p> <p>(2) 配当年次の考え方</p>	<p>(15 ページ)</p> <p>(2) 配当年次の考え方</p>

<p>本課程では、学生が体系的に科目を履修し、研究指導を受けられるように配当年次を設定する。「研究基礎科目」として、学生が自立的な研究法を修得する「メディア表現研究Ⅰ」を1年前期に開講する。研究の理論化・体系化も含め、研究法をより具体的に修得する「メディア表現研究Ⅱ」を1年後期に開講する。<u>プロジェクトを進める上で実務家養成へ必要となる知識修得として「知的財産権特論」を1年前期に開講する。</u></p> <p>「プロジェクト研究科目」のうち、「メディア表現研究Ⅰ」を学修した後の1年後期に「プロジェクト研究Ⅰ」を、「メディア表現研究Ⅱ」を学修した後の2年前期に「プロジェクト研究Ⅱ」開講する。</p> <p>「特別研究科目」である「メディア表現特別研究Ⅰ」、「メディア表現特別研究Ⅱ」、「メディア表現特別研究Ⅲ」の3科目については、1年次から通年の3年間に渡って開講し、研究指導教員が継続的に指導を行う。</p>	<p>本課程では、学生が体系的に科目を履修し、研究指導を受けられるように配当年次を設定する。「研究基礎科目」として、学生が自立的な研究法を修得する「メディア表現研究Ⅰ」を1年前期に開講する。研究の理論化・体系化も含め、研究法をより具体的に修得する「メディア表現研究Ⅱ」を1年後期に開講する。</p> <p>「プロジェクト研究科目」のうち、「メディア表現研究Ⅰ」を学修した後の1年後期に「プロジェクト研究Ⅰ」を、「メディア表現研究Ⅱ」を学修した後の2年前期に「プロジェクト研究Ⅱ」開講する。</p> <p>「特別研究科目」である「メディア表現特別研究Ⅰ」、「メディア表現特別研究Ⅱ」、「メディア表現特別研究Ⅲ」の3科目については、1年次から通年の3年間に渡って開講し、研究指導教員が継続的に指導を行う。</p>
---	--

(新旧対照表) シラバス (授業計画)

新	旧
(資料3) シラバス参照	(資料3) シラバス参照

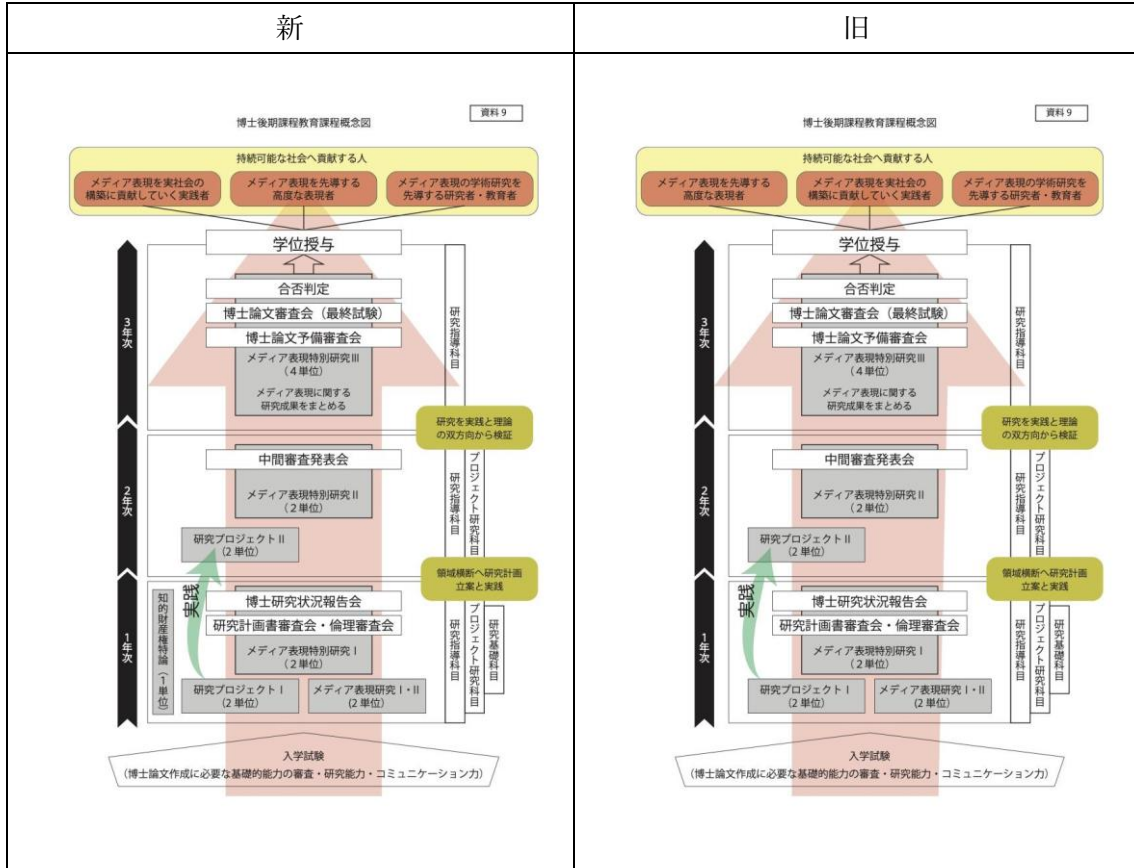
(新旧対照表) 履修モデル

新	旧
(資料4) 履修モデル参照	(資料4) 履修モデル参照

(新旧対照表) 時間割

新	旧
(資料5) 時間割参照	(資料5) 時間割参照

(新旧対照表) 概要図 (資料6)



※原寸版は添付する。

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

7. <授業科目の内容が不明確>

授業科目について、授業計画の内容がほとんど変わらず、授業科目間での履修内容の差異が不明確なもの(例:「プロジェクト研究 I」「プロジェクト研究 II」)や、通年の授業科目であるが 15 回分の授業計画しか示されていないなど具体的な開講形態が不明確なもの(「メディア表現特別研究 I」「メディア表現特別研究 II」「メディア表現特別研究 III」)があるため、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

審査意見を踏まえ、「プロジェクト研究 I・II」について授業の概要を明確にした。具体的には、「プロジェクト研究 I」では、学生が自らの研究テーマに対して、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める。「プロジェクト研究 II」では、学生が研究テーマに対して、社会との接続を踏まえたプロジェクトを実践しながら、新たな表現拡張と理論化・体系化へつなげる中心的科目として、博士論文作成に向けた実践的研究を展開する。

「プロジェクト研究 I」の進め方は、プロジェクトベースドラーニング (PBL) と研究を協調させ、開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。領域横断的な視点から研究が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。社会と研究との多角的な接点を探るプロジェクトの企画力と、プロジェクトを進めていくためのコミュニケーション力の獲得を目指す。

「プロジェクト研究 II」もまた、開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。プロジェクトの遂行と議論を通じて領域横断力と実践力の獲得を目標とし、その成果をまとめることも含め実施する。

また、「メディア表現特別研究 I・II・III」について開講形態を明確にした。「メディア表現特別研究 I・II」では、研究テーマの設定から、研究計画設定と倫理審査への準備、研究報告会での発表、あるいは博士論文の個別指導と進捗報告などを指導するため隔週実施する。

「メディア表現特別研究 III」では、博士論文予備審査会と博士論文及び研究制作への個別指導など、学位取得へ向けた指導のため毎週実施する。

それらが記載されていないため「設置の趣旨等を記載した書類」へ加筆する。

また、「シラバス (授業計画)」を修正する。

(新旧対照表) 授業シラバス

新	旧
(資料3) シラバス参照	(資料3) シラバス参照

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(14 ページ)</p> <p>③特別研究科目</p> <p>「特別研究科目」は、「メディア表現特別研究 I」(2 単位)、「メディア表現特別研究 II」(2 単位)、「メディア表現特別研究 III」(4 単位)の合計 8 単位とし、3 年間の通年履修となる必修科目として配置する。「<u>メディア表現特別研究 I・II</u>」は隔週にて開講し、「<u>メディア表現特別研究 III</u>」は毎週開講とし、学生の主体的な研究をサポートするため、研究指導教員等の助言・指導を踏まえて研究テーマを設定したうえで、3 年間の継続研究をもとに最終的に博士論文を取りまとめる。本学修士課程以外からの学生について、「メディア表現特別研究 I」にて個別に研究のサポートを実施する。学生は、研究指導教員との協議のもとで研究計画を立案し、自ら進行をマネジメントしながら研究を深化させ、所期の成果が得られるよう研究を進める。また学会等の学外への発表を念頭に指導し、「発信力」の修得も同時に狙う。</p>	<p>(14 ページ)</p> <p>③特別研究科目</p> <p>「特別研究科目」は、「メディア表現特別研究 I」(2 単位)、「メディア表現特別研究 II」(2 単位)、「メディア表現特別研究 III」(4 単位)の合計 8 単位とし、3 年間の通年履修となる必修科目として配置する。</p> <p>当該科目では、学生の主体的な研究をサポートするため、研究指導教員等の助言・指導を踏まえて研究テーマを設定したうえで、3 年間の継続研究をもとに最終的に博士論文を取りまとめる。本学修士課程以外からの学生について、「メディア表現特別研究 I」にて個別に研究のサポートを実施する。学生は、研究指導教員との協議のもとで研究計画を立案し、自ら進行をマネジメントしながら研究を深化させ、所期の成果が得られるよう研究を進める。また学会等の学外への発表を念頭に指導し、「発信力」の修得も同時に狙う。</p>

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【大学等の設置の趣旨・必要性】

8. <社会人学生への配慮が不明確>

社会人学生の入学についても言及されているが、社会人学生への履修指導上の配慮について明確に説明すること。

(対応)

本学は既存の博士前期課程において社会人短期在学コースを設け、講義などは時間割をまとめ履修しやすくし、研究指導も個別に時間を設け指導するなど、社会人へ配慮した履修対応を実施している。

審査意見を踏まえ、博士前期課程と同様に、社会人学生へ向けた配慮として時間割について柔軟に対応するとともに研究指導も個別に時間を設け指導する。入学後の対応として、基礎力が不足する場合、特別研究での更なる個別指導や、博士前期課程の授業を受講するなどし、基礎的な能力を補う。なお、博士前期課程にある社会人短期在学コースは、本課程では設けない。

よって、「設置の趣旨等を記載した書類」へ以下を追加する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(22 ページ) 6. <u>社会人学生への対応</u> (1) <u>趣旨</u> <u>社会人の生涯学習ニーズ等に応え、社会人が職業に就いたまま、生活環境に応じた就学環境を提供するため、本課程において仕事を 持つ社会人の学生（以下「社会人学生」という。）が勤務を継続しながら大学院で学修することができる環境を整備する。</u> (2) <u>履修指導、研究指導の方法</u> <u>通常の学生と同様、学生を担当する主研究指導教員を決定する。主研究指導教員は、履修科目及び研究活動全般について、学生の相談に応じ、学修及び研究の進行に必要な指導を行う。また必要に応じて博士前期課程の授業を受講するなど基礎的な能力を補う。</u>	(追加)

<p>(3) 授業の実施方法</p> <p>社会人学生などへの便宜を図るため、授業は、可能な限り5限など参加しやすい時限に開講、あるいは、まとめて受講可能な時間割とする。また、研究指導の際は、個々の社会人学生の事情と指導教員の負担を配慮した指導時間を設定する。</p>	
--	--

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【教育課程等】

9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確>

研究指導・学位審査について、以下の点が不明確であるので、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(1)博士論文の質保証に必要な審査体制を構築する旨記載があるが、審査水準を維持するためにどのような工夫を行うのか。

(対応)

博士前期課程においてこれまで、審査水準を維持するため、毎年度審査後の検証を教授会にて実施している。

審査意見 9(1)を踏まえ、本課程においても博士前期課程同様、審査水準を維持するため、内部質保証の観点から、審査後検証を教授会にて実施し審査水準の維持をはかる。

審査水準の維持を明確にするため、「設置の趣旨等を記載した書類」を修正する。

(修正は 9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確> (3)を参照)

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【教育課程等】

9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確>

研究指導・学位審査について、以下の点が不明確であるので、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(2)主研究指導教員になることができる教員は、どこまでの範囲なのか。

(対応)

審査意見を踏まえ、主指導教員になることができる教員は特別研究科目を担当する研究指導教員(マル合教員)のみであることを明記する。よって、「設置の趣旨等を記載した書類」を修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(17 ページ)</p> <p>1. 教育方法、履修指導上の特色</p> <p>(1) 体系的な研究指導科目</p> <p>学生が自身の研究内容に応じた研究遂行に係る基礎を養いながら、段階的に研究指導教員の指導による研究テーマの考察が体系的に進められるように科目の配当年次を設定する。</p> <p>(2) 複数教員による指導体制(チームティーチング)</p> <p>研究指導体制は、基本的に学生1人に主研究指導教員1人が担当する。学生の研究内容に従い、指導を担当する教員と連携しながら、2人の副研究指導教員を含めた複数教員によるチームを構成し学生の指導体制をつくる。</p> <p><u>主研究指導教員、副研究指導教員は特別研究科目を担当する研究指導教員とする。</u></p>	<p>(17 ページ)</p> <p>1. 教育方法、履修指導上の特色</p> <p>(1) 体系的な研究指導科目</p> <p>学生が自身の研究内容に応じた研究遂行に係る基礎を養いながら、段階的に研究指導教員の指導による研究テーマの考察が体系的に進められるように科目の配当年次を設定する。</p> <p>(2) 複数教員による指導体制(チームティーチング)</p> <p>研究指導体制は、基本的に学生1人に研究指導教員1人が担当する。学生の研究内容に従い、指導を担当する教員と連携しながら、2人の副研究指導教員を含めた複数教員によるチームを構成し学生の指導体制をつくる。</p>

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【教育課程等】

9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確>

研究指導・学位審査について、以下の点が不明確であるので、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(3)副指導研究教員 2 名が博士論文審査に含まれるとあるが、公平・公正性等をどのように担保するか。

(対応)

審査意見を踏まえ、公平・公正性の観点から博士論文審査の副査について、副研究指導教員を 2 名から 1 名に改める。よって、「設置の趣旨等を記載した書類」を修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(19 ページ)</p> <p>7) 主査・副査の決定 (3 年次 10 月)</p> <p>教授会は、学生の研究成果である博士論文を審査するため、その研究テーマの審査に適した専門分野の教員の中から主査 1 名及び副査 2 名を教授会で選出し、学生に通知する。</p> <p>主査には、当該学生の研究指導を担当している教員以外の研究指導教員を充てる。副査には、<u>副研究指導教員から 1 名と、研究指導担当教員以外から 1 名を選出することとし、当該学生の主研究指導教員は審査に加わらない。</u> なお、必要に応じて教授会の承認のもと、副査に 1 名を学外から招聘し追加することができるものとする。主査・副査は、博士論文予備審査及び博士論文審査の両方を行う。</p>	<p>(19 ページ)</p> <p>7) 主査・副査の決定 (3 年次 10 月)</p> <p>教授会は、学生の研究成果である博士論文を審査するため、その研究テーマの審査に適した専門分野の教員の中から主査 1 名及び副査 2 名を教授会で選出し、学生に通知する。</p> <p>主査には、当該学生の研究指導を担当している教員以外の研究指導教員を充てる。副査には、副研究指導教員等から選出することとし、当該学生の主研究指導教員は審査に加わらない。なお、必要に応じて教授会の承認のもと、副査に 1 名を学外から招聘し追加することができるものとする。主査・副査は、博士論文予備審査及び博士論文審査の両方を行う。</p>
<p>(20 ページ)</p> <p>4. 研究成果の審査と研究水準の確保への配慮</p> <p>(1) 論文審査体制</p> <p>博士論文の審査は、教授会で選出する主査</p>	<p>(20 ページ)</p> <p>4. 研究成果の審査と研究水準の確保への配慮</p> <p>(1) 論文審査体制</p> <p>博士論文の審査は、教授会で選出する主査</p>

<p>1名及副査2名の体制でおこなう。主査は、当該学生の研究指導教員以外から選出し、副査は副研究指導教員の1名を選出する。なお副査は、論文の専門性などを勘案し、必要に応じて学外者を招聘し1名を追加することができる。</p> <p>当該審査については、段階的に中間審査発表会や博士論文予備審査会を実施し、倫理的側面等を含めて博士論文の質保証に必要な審査体制を構築する。</p> <p>計画的な審査を経て、最終的に提出された博士論文をもとに、学生は、教授会において合否判定、修了認定(学位授与)の審議を受ける。</p> <p><u>審査水準を維持するため、内部質保証の観点から、審査後に教授会にて検証し審査水準の維持をはかる。</u></p>	<p>1名及副査2名の体制でおこなう。主査は、当該学生の研究指導教員以外から選出し、副査は副研究指導教員の2名を選出する。なお副査は、論文の専門性などを勘案し、必要に応じて学外者を招聘し1名を追加することができる。</p> <p>当該審査については、段階的に中間審査発表会や博士論文予備審査会を実施し、倫理的側面等を含めて博士論文の質保証に必要な審査体制を構築する。</p> <p>計画的な審査を経て、最終的に提出された博士論文をもとに、学生は、教授会において合否判定、修了認定(学位授与)の審議を受ける。</p>
---	---

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【教育課程等】

9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確>

研究指導・学位審査について、以下の点が不明確であるので、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(4)審査対象を「博士論文『等』」としているが、論文以外に何を対象とするのか。

(5)制作物も評価対象とする場合、論文との関係や、制作物をどのように審査するのか。

(対応)

審査意見を踏まえ、「博士論文等」は記載を「博士論文」と改める。博士論文のみ審査対象とし、博士論文以外は審査対象とはしない。よって、「学則」を修正する。

(新旧対照表) 学則

新	旧
(7 ページ) 第44条 学長は、本学博士前期課程に2年(第26条又は第27条の規定により入学した者については、第29条の規定により定められた在学すべき年数)以上在学し、第35条第1項に規定する単位数を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文等の審査及び最終試験に合格した者に対し博士前期課程の修了を認定する。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、本学に1年以上在学すれば足りるものとする。 2 学長は本学博士後期課程に3年(第26条又は第27条の規定により入学した者については、第29条の規定により定められた在学すべき年数)以上在学し、第35条第2項に規定する単位数を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、 <u>博士論文</u> の審査及び最終試験に合格した者に対し博士後期課程の修了を認定する。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者につ	(7 ページ) 第44条 学長は、本学博士前期課程に2年(第26条又は第27条の規定により入学した者については、第29条の規定により定められた在学すべき年数)以上在学し、第35条第1項に規定する単位数を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文等の審査及び最終試験に合格した者に対し博士前期課程の修了を認定する。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、本学に1年以上在学すれば足りるものとする。 2 学長は本学博士後期課程に3年(第26条又は第27条の規定により入学した者については、第29条の規定により定められた在学すべき年数)以上在学し、第35条第2項に規定する単位数を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文等の審査及び最終試験に合格した者に対し博士後期課程の修了を認定する。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者に

いては、本学に2年以上在学すれば足りるものとする。	ついては、本学に2年以上在学すれば足りるものとする。
---------------------------	----------------------------

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【教育課程等】

9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確>

研究指導・学位審査について、以下の点が不明確であるので、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(6)博士論文提出要件として「認知された学術論文誌」等が定められているが、認知されているかどうかの基準が不明確である。

(対応)

審査意見について、博士論文提出要件として「認知された学術論文誌」等について、基準が不明確であるとの指摘を踏まえ、認知された学術論文誌について、その学術論文誌を発行する主たる学会が以下を満たしていることをさすものとする。

- 1.学術研究の向上発達を主たる目的として、その達成のための学術研究活動を行っていること
- 2.活動が研究者自身の運営により行われていること
- 3.構成員（個人会員）が100人以上であり、かつ研究者の割合が半数以上であること
- 4.学術研究（論文等）を掲載する機関誌を年1回継続して発行していること

上記のことが明確に示されていないことから、「設置の趣旨等を記載した書類」を以下のとおり修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(20 ページ) (2) 博士論文提出資格 博士論文の提出資格は、下記の4つの基準のうち1つを満たすことが必要となる。 基準1: 認知された学会論文誌において、単記あるいは筆頭著者として、レフリー付の原著論文が2編以上採録または採録許可であること。ただしその内1編は、条件付採録も採録許可と同等とみなすが、最終試験までに	(20 ページ) (2) 博士論文提出資格 博士論文の提出資格は、下記の4つの基準のうち1つを満たすことが必要となる。 基準1: 認知された学会論文誌において、単記あるいは筆頭著者として、レフリー付の原著論文が2編以上採録または採録許可であること。ただしその内1編は、条件付採録も採録許可と同等とみなすが、最終試験までに

<p>は採録が決定しているものとする。投稿予定あるいは投稿中は不可とする。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p> <p>基準 2:</p> <p>認知された学会論文誌において、単記あるいは筆頭著者として、レフリー付の原著論文が1編以上採録または採録許可であること。ただし、条件付採録も採録許可と同等とみなすが、最終試験までには採録が決定しているものとする。投稿予定あるいは投稿中は不可とする。</p> <p>認知されたコンテスト等に研究成果作品1点以上が入賞または入賞決定していること。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p> <p>基準 3:</p> <p>認知された出版社から研究成果を単著者として1編以上出版または出版決定していること。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p> <p>基準 4:</p> <p>基準1～基準3に該当せずとも、優れた活動や著書など極めてユニークな（本学らしい）研究業績を残し、その成果を認知され</p>	<p>は採録が決定しているものとする。投稿予定あるいは投稿中は不可とする。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p> <p>基準 2:</p> <p>認知された学会論文誌において、単記あるいは筆頭著者として、レフリー付の原著論文が1編以上採録または採録許可であること。ただし、条件付採録も採録許可と同等とみなすが、最終試験までには採録が決定しているものとする。投稿予定あるいは投稿中は不可とする。</p> <p>認知されたコンテスト等に研究成果作品1点以上が入賞または入賞決定していること。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p> <p>基準 3:</p> <p>認知された出版社から研究成果を単著者として1編以上出版または出版決定していること。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p> <p>基準 4:</p> <p>基準1～基準3に該当せずとも、優れた活動や著書など極めてユニークな（本学らしい）研究業績を残し、その成果を認知され</p>
--	--

<p>た場で公開していること。本基準の評価に際し、学外の有識者を招聘し判断する。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p> <p><u>なお認知された学術論文誌とは、その学術論文誌を発行する主たる学会が以下を満たしていることをさす。</u></p> <p><u>1.学術研究の向上発達を主たる目的として、その達成のための学術研究活動をおこなっていること</u></p> <p><u>2.活動が研究者自身の運営によりおこなわれていること</u></p> <p><u>3.構成員（個人会員）が100人以上であり、かつ研究者の割合が半数以上であること</u></p> <p><u>4.学術研究（論文等）を掲載する機関誌を年1回継続して発行していること</u></p>	<p>た場で公開していること。本基準の評価に際し、学外の有識者を招聘し判断する。</p> <p>認知された国際会議等に単記あるいは筆頭者としての発表経験が1回以上あること。</p> <p>口頭発表であるか、ポスター発表であるかは問わないものとする。</p>
---	--

(是正事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【教育課程等】

9. <研究指導・学位審査の体制等が不明確>

研究指導・学位審査について、以下の点が不明確であるので、具体的に説明の上、必要に応じて適切に改めること。

(7)博士論文の全文や要旨・審査結果の公表等についての、規程等が準備されているのか。

(対応)

審査意見にて不明確であるとの指摘を踏まえ、博士論文の公開について、情報科学芸術大学院大学附属図書館にて全文を公開すること。また、ホームページにて要旨と審査結果を公開する。これら公開等の規定について、開学までに準備する。

上記のことが明確に示されていないことから、「設置の趣旨等を記載した書類」を以下のとおり修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(21 ページ) (3) 学位論文等の公表 学生は、博士論文の審査申請の際に、研究指導教員と当該論文等の公表について協議し、その予定を付して提出する。 <u>論文は本学図書館にて保管するとともに全文公開し、大学のホームページで題名、要旨、審査結果を公表する。</u>	(21 ページ) (3) 学位論文等の公表 学生は、博士論文の審査申請の際に、研究指導教員と当該論文等の公表について協議し、その予定を付して提出する。論文は本学図書館で保管するとともに、大学のホームページで題名、要旨等を公表する。

(改善事項) メディア表現研究科 メディア表現専攻 (D)

【教育課程等】

10. <チームティーチングの方針が不明確>

「プロジェクト研究科目」などでチームティーチングにより教育・研究を行うとされているが、博士後期課程において複数教員が専門的な指導を実施することは複数の指導教員の決定基準や綿密な教員間のすり合わせが必要と考えられる。どのような方法で実践され、どのような効果を意図しているのか具体的に説明すること。

(対応)

審査意見 10 を踏まえ、チームティーチングに関する指導體制が不明確だったため、以下にて説明するとともに、チームティーチングの記載を修正する。具体的には次の通りである。博士前期課程において、メディア表現研究の研究手法として「孤立した個人からネットワークへ」、「孤立した課目（サブジェクト）から課目間の協働による"具体的な計画（プロジェクト）"へ」、という、大学院設置時から掲げてきた基本方針を基に、領域横断的な場として「プロジェクト」を配置し、実践的な研究を進めてきた。メディアの抱える様々な問題点を多様な視点から捉え、「新しい表現」を生み出すための積極的な姿勢を、専門の異なる複数の教員がチームを組織し教授してきた。

本課程では、学生がおこなう研究を領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、研究に求められる知識や研究・分析手法等を修得させたいうで、多面的な考察を進められるよう、個々の専門性の異なる教員がチームで指導できる体制により、領域横断しながら、その交流の中から生み出される、新しい知のあり方を身につけ、新たな価値の創出へ向けた自立的な研究を支える環境を整えることを意図するものである。多面的な考察を進めるため、1人の学生に対して、主研究指導教員に加え、研究をサポートする副研究指導教員を配置し、複数の教員による指導體制とするものである。

チームティーチングでは、主研究指導教員が中心となり指導し、副研究指導教員は適時指導する体制とするが、指導の内容は主研究指導教員が把握集約し、取りまとめ指導していくものとする。これまでも博士前期課程においてチームティーチングを実施しており実施体制は継続できるものである。

チームティーチングの実践方法と効果を具体的に説明するため、「設置の趣旨等を記載した書類」を以下の通り修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(13 ページ)	(13 ページ)
(3) 研究を支えるチームティーチングによる指導科目の設定	(3) 研究を支えるチームティーチングによる指導科目の設定

<p>学生がおこなう研究を領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、研究に求められる知識や研究・分析手法等を修得させたうえで、多面的な考察を進められるよう、<u>個々の専門性の異なる教員がチームで指導できる体制により、領域横断しながら、その交流の中から生み出される、新しい知のあり方を身につけ、新たな価値の創出へ向けた自立的な研究を支える環境を整えることを意図する。</u>1人の学生に対して、主研究指導教員に加え、研究をサポートする副研究指導教員を配置し、複数の教員による指導体制とする。<u>主研究指導教員が中心となり指導し、副研究指導教員は適時指導する体制とするが、指導の内容は主研究指導教員が把握集約し、取りまとめ指導していく。</u></p>	<p>学生がおこなう研究を領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、研究に求められる知識や研究・分析手法等を修得させたうえで、多面的な考察を進められるよう、<u>個々の専門性が異なる教員がチームで指導できる科目を設定し、新たな価値の創出へ向けた自立的な研究を支える環境を整える。</u>1人の学生に対して、主研究指導教員に加え、研究をサポートする副研究指導教員を配置し、複数の教員による指導体制とする。</p>
---	--

IAMAS NOW ! STUDIO ! IMPACT ! FOOD ! PLAY !

Christa Sommerer クリスタ・ソムラー

Former Associate professor of IAMAS, Director of IAMAS Campus Exhibition, Head of Interface Culture, University of Art and Design, Linz, Austria

元情報科学芸術大学院大学助教授、キャンパス展ディレクター、現リンツ美術工芸大学・インタラクティブカルチャー代表

In 2004 IAMAS has been given the unique opportunity to present itself for the first time at a large exhibition outside Japan, as part of Ars Electronica's Campus Exhibition at the University of Art and Design in Linz. As a former Associate Professor of IAMAS and a long-term participant of Ars Electronica and a former Golden Nica Award winner (for Interactive Art in 1995, together with Laurent Mignonneau) it was a particular pleasure for me to be asked to help coordinate this student exhibition. IAMAS is widely considered one of Asia's top media art education institution and it has gained an international reputation for its excellent facilities, highly qualified teaching staff, low student-teacher ratio, highly qualified students and graduates, international exchange and the Artist in Residence Program and its many extra-curricular programs. Teachers and staff of IAMAS have put together an exhibition that represents the un-bureaucratic, vibrant diversity of IAMAS activities, its curriculum and programs.

IAMAS NOW ! STUDIO ! IMPACT ! FOOD ! PLAY ! brought together the typical IAMAS spirit to Ars Electronica 2004 in Linz. It was a unique mixture of study, play, exchange, research and innovation created by IAMAS students, teachers, graduates and friends around the world. My personal resume after the exhibition was that it had a very positive impact on people in Linz and on the general public of the Ars Electronica Festival and I only received the best of comments about the high and sophisticated quality of the student works. One of the most touching comments for me was however by a IAMAS student who participated in the show and later told me that this experience *changed his life!* Let us hope that we were able to changed the lives of visitors a little bit too and that we gave them an impression of vibrant and positive spirit of Japanese media art through this exhibition, which I am proud to have been able to be part of.

2004年、IAMASは、リンツ美術工芸大学を会場に「アルス・エレクトロニカキャンパス展」に参加する、国外における初めての大規模な展覧会の、またとない機会を得ました。私はIAMASの元助教として、またアルス・エレクトロニカに長く関わり、ゴールデンニカ賞を受賞した(1995年、ロラン・ミニョーノとともにインタラクティブアート部門で受賞)ので、この学生展のコーディネイトへの協力依頼を嬉しく思いました。IAMASは、素晴らしい設備、有能な教員、教員一人に対する学生数の少なさ、優秀な学生・卒業生、国際交流やアーティストインレジデンス事業、課外活動などの様々な面で国際的に評判が高く、アジアの最高のメディア・アート教育機関の一つと見なされています。今回、IAMASの教員とスタッフは、自発的、刺激的で多様なIAMASの活動、カリキュラムや事業を紹介する展示を作りあげました。

「IAMAS NOW! STUDIO ! IMPACT ! FOOD ! PLAY !」は、IAMASらしさを集めて、リンツのアルスエレクトロニカ2004で紹介した展示です。IAMASの学生、教員、卒業生、そして世界各地の友人たちによって創りだされた学び、遊び、交流、研究、そして開発の類いまれな複合体といえましょう。

行われた展示についての印象ですが、リンツ市民とアルスエレクトロニカ・フェスティバルを訪れた観客はとても良い印象を持ったと思います。学生の作品については、質が高くすぐれた技術を持っているという、大変良いコメントばかりを頂きました。私が一番感動したコメントは、展示に参加したIAMASの学生からのものだったのですが、彼は「この経験で人生が変わりました!」と後に語ってくれました。この展示を通して、展示を訪れてくれた人々の人生を少しでも変えることができたこと、そして刺激的でポジティブな精神を持つ日本のメディアアートの印象を与えることができてよかったです。この展示の一員になれたことを誇りに思っています。

Interviews



Gerfried Stocker

Artistic Director of Ars Electronica
ゲルフリート・シュトッカー
アルスエレクトロニカ アーティスティック・
ディレクター

I'm totally excited by the whole exhibition, and I think what is very impressive for someone here from Europe is the very high quality of the finish of how each installation is made.

It's not just a concept, not just a quick draft. It's really very well designed, very well handcrafted, and the innovation of the concepts also is very exciting, so congratulations to IAMAS and all the students and teachers there for this wonderful work.

展示全体は本当に素晴らしくて驚いています。また、それぞれの作品も非常に完成度が高く、ヨーロッパからの来場者は大変驚いたのではないかと思います。コンセプトワークやプロトタイプ的なものではなく、本当にデザインがきちんとしていて、よく出来ていると思います。それから、コンセプトの創造性も大変素晴らしいです。

IAMASの先生方、学生の皆さん、このような素晴らしい展示をされて、本当によかったですね。



Alex Adriaansens

Director of V2_ organization
アレックス・アドリアンセンズ
V2_ ディレクター

I think it gives a good overview of what IAMAS is doing at the moment.

I know IAMAS from its first days, I've been there when there were almost no students. Now I can see how IAMAS has developed over time, and one can see the diversity of the conceptual artistic approaches of the students and the works they make. One of the things one can see in the exhibition is this typical Japanese approach which is the preciseness and the fineness of (interface) design. The playfulness of handling sounds, images and the interaction design a.s. is very nicely done.

I'm very pleased to see how IAMAS in general is developing. It's cool.

この展示を見ると、今、IAMASでどういう活動がなされているがよく分かると思います。私は、IAMASのことを設立当時から知っていて、まだほとんど学生がいなかったころに訪れたことがあります。この展示を見て、IAMASがどれだけ成長したか分かりました。様々な学生が、多種多様な作品を作っているというのが印象的です。それから、この展示を見て気付くことは、とても日本的なアプローチが用いられてる、つまり、精密で手の込んだインターフェイスデザインになっていることです。音やアイコンと遊びながらインターフェイスを使うというもうまくできていると思います。

IAMASの素晴らしい成長を見ることができて、とても嬉しく思いました。



Peter Weibel

Media theorist, Curator and Artist, ZKM
director

ペーター・ヴァイベル

メディア論、キュレーター、アーティスト、
ZKM ディレクター

First of all, I found most of the works very poetic. I also liked the broad range of the works between playfulness and conceptual works. I also liked that some of the pieces had been closely designed, because I think it's important to improve our ambience with electronic media.

I think, I also liked... each work, whether a design or conceptual work, had a visible art aspect. It was not just technology, or just a game. It always had an aspect of art. And I was surprised with the high quality, on a design level. I would say, not only poetic justice, they have also a kind of poetic perfection.

まず、ほとんどの作品がとても詩的だと思いました。遊び心を引き出すものから、コンセプトを表現するものまで、幅広いジャンルの作品だということも良いですね。鑑賞者が電子メディアと親密性をもって係わることが大切だと思います。その意味でも、これらの作品は、デザインも素晴らしいかと思います。デザイン的な作品も概念的な作品も、それぞれ目で見ることができる芸術性を持っているということが良かったですね。技術だけでなくゲームだけでなく、アートという側面が必ず含まれているんです。デザインもとてもレベルが高くて驚きました。創作として正しいばかりではなく、作品としてもある種完成していると言えるのではないのでしょうか。



Erkki Huhtamo

Professor, Department of Design | Media Arts, UCLA

エルキ・フータモ

UCLA デザイン | メディアアート学部教授

I think the most important thing that makes this IAMAS exhibition so impressive is the playful creativity that manifests itself on every level. This is something very different from what I usually experience in the West, and I think it is one of the reasons why people have been so surprised to see such a collection of wonderful work.

Yet the work from IAMAS is not limited to just one category or genre, which seems to be the case with many art schools these days. Variety and openness are very important things, and I see them everywhere in the work from IAMAS. I am looking forward to seeing what surprises future will bring us from Ogaki city!

IAMAS の展示を印象的なものにするために最も大切なことは、作品のどの段階においても、遊び心あふれる創造性を織り込んでおくことだと考えます。それは、私の知る西洋のものとは、随分違うでしょう。ですから、このような素晴らしい作品がこんなに集まっているのを見ると、大変驚くのです。

IAMAS は、最近の芸術学校のように、ひとつのカテゴリーにとらわれていないように思います。これが最も重要なことだと考えます。

IAMAS の今後の作品にも、非常に期待しています。



Casey Reas

Media artist, co-developer of the

Processing computer language

ケイシー・リース

メディアアーティスト、コンピュータ言語

「Processing」開発者

I think the exhibition has a wonderful, playful feel. I'm really happy to see so many physical objects being built where there is no obvious computer and you interact directly with your hands rather than through a mouse and keyboard. I appreciate the way things are built -- there's a refined physical quality to the objects that makes the exhibition very special.

IAMASの展示は、本当に素晴らしく遊び心があふれて楽しいと思います。多くの作品で、コンピュータが見えないようなしつらえにしてあったり、マウスやキーボードではなく手を使って操作できるようにしてあったのがとても良かったと思います。

こういった、作品の作り方が素晴らしいと思いました。このことが展示を特別なものにしていてのではないのでしょうか。



Machiko Kusahara

Curator, Professor of Waseda University

草原真知子

キュレーター、早稲田大学文学部教授

Many people mentioned that the IAMAS Exhibition was almost as important as the OK Centre exhibition that featured the award winning works of Ars Electronica this year. I think this exhibition was a huge success.

The quality was high, there was a variety, Japanese taste and international scope were well balanced and mixed, while not only visual but also sound and web-based works were shown. Overall, the exhibition (including the café, which was a very nice idea) clearly showed the wide variety of media art today, and its connection to youth culture and pop culture.

OKセンターにはアルスエレクトロニカで賞をとった作品が並んでいるわけですが、IAMASの展示はそれに匹敵するくらい見ごたえがある、という感想を多くの人から聞きました。この展示は大成功だと思います。作品の質が高いということ、バラエティがあるということ、それから日本的なものインターナショナルなものがうまくミックスされ、配分されていたということ、そしてビジュアルなものだけでなく、サウンドやウェブなどがあったのがいいですね。

カフェも含めて、今のメディアアートの広がりや、若者の文化やポップカルチャーなどもつながっていることが全体として出ていたと思います。

Coverage Ars Electronica and the Campus Exhibition was featured in local newspaper in Linz, the New York Times and Gifu Shimbun as well as web sites such as Leonard online and arte.

観客の動きに反応する映像ノ高品質のCG



この映像は、大垣の「AMAS」展で展示された作品の一部。観客の動きに応じて映像が変化する、高品質のCGが特徴。観客は、この作品と対峙し、その美しさを堪能することができる。

高い完成度、世界が絶賛

大垣の「AMAS」展

技術の粋を見せつける

大垣の「AMAS」展は、ヨーロッパのメソニアアート展に参加し、高い完成度と技術の粋を見せつける。観客の動きに応じて映像が変化する、高品質のCGが特徴。観客は、この作品と対峙し、その美しさを堪能することができる。

大垣の「AMAS」展は、ヨーロッパのメソニアアート展に参加し、高い完成度と技術の粋を見せつける。観客の動きに応じて映像が変化する、高品質のCGが特徴。観客は、この作品と対峙し、その美しさを堪能することができる。

GIFU SHIMBUN, TUESDAY, SEPTEMBER 21, 2004

岐阜新聞(2004年9月21日) 岐阜新聞社提供

アルス・エレクトロニカとキャンパス展について、地元リンツの新聞、ニューヨークタイムズ、岐阜新聞のほか、Leonardo onlineやarteといったウェブサイトなどでもその様子が紹介されました。

Newspaper:

OÖ.NachrichtenThema (August 27)

"Die Zukunft der Medienkunst"

Neues Volksblatt (September 4)

"Irritationen, die nicht gleich das Prädikat 'Kunst' tragen"

Kronenzeitung (September 5)

"Geishas und Computer"

Der Standard (September 7)

"Linz, wie es surft und lacht"

The New York Times (September 8)

Gifu Shimbun (September 21)

Web site:

arte

http://www.arte-tv.com/fr/search__results/698810.html

Leonardo online

http://mitpress2.mit.edu/e-journals/Leonardo/reviews/nov2004/ars_engeli.html

レジデンス・プログラムとは一般的に、アーティストがホスト機関（そして地域）に一定期間滞在することで、異文化に触れながら制作、研究、交流を行うものである。特定の場に逗留し活動すること、アーティストにとってそれは、他者でありながらその地域のアイデンティティ — もしくはその中間領域 — に身を置くことであり、ふだんと異なるポジションから自らの活動を見直し、同時にその地域に別の視点をもたらす機会となる。

実際の現場で起こる予想外の出来事さえ、新たな価値へと創造的に転換していく…。そのようなフレキシビリティや強靭さをレジデンスは育む場としてある。

数々の経験は、滞在した者、受け入れた側相互にとってかけがえないものとなるはずである。

国内においてはより多くのレジデンス・プログラムが待たれる状況であるが、その中で世界にも突出した成果を収めているのが、IAMAS が開学以来実施しているアーティスト・イン・レジデンス (AIR) プログラムである。AIR は国際的に活躍するアーティストや今後期待される主にメディアアーティストを受け入れ支援することで新たな飛躍の機会を提供しただけでなく、教育機関としての IAMAS の評価を国内外で高めるといふ、レジデンスと教育の相乗的関係を生み出してきた。

IAMAS。大垣にある、主にメディアアートを学び研究するこの教育機関は、少数精鋭で多彩な人材を擁している。コンパクトで緊密なコミュニティ、といってもよいその場では、各人の研究、活動、スキルを前提に、相互のコミュニケーションやコラボレーションが積極的に行われている。そのような場にアーティストが迎えられ、レジデンスと教育のかつてない創造的触発が起きたといえる。IAMAS には世界に直結するまなざしや実践力、ネットワークがもたらされ、また滞在アーティストが IAMAS の現場から学んだものが、作品や活動に活かされていく。

視点が変わる、知覚が変わる、創造する、実践する、社会が、未来が変わる…。あらためて私たちは、人と人が出会い、時間を過ごすことで起こりうる世界の変容可能性に眼を向ける必要がある。ヨーゼフ・ボイスが「資本 (Das Kapital)」を既存の経済価値に還元されえず人間や社会へと拡張された概念とし、ピエール・クロソウスキーが人を「生きた貨幣」(La Monnaie Vivante) と呼んだように。そこでは変容の契機となる人間 (アーティスト) だけでなく、関わった各人が新たに変容の契機となることが求められ、またそれを促進していく孵化器としての場 — 異なる者が出会い創造的に関われる — をもつことがますます重要となる。IAMAS の AIR はいうまでもなく、きわめてユニークな変容のための孵化器である。このプログラムが、今後も人々を触発し育てるとともに、その存在がより多くの異なる孵化器を派生させていくことを期待してやまない。

Yukiko Shikata

四方 幸子

137

Residency programs generally give artists the opportunity to create works at a host institution – and region, over a distinct period. For artists, to sojourn, conduct research and collaborate, means also to position themselves as outsiders; thus they experience not only a different culture but also have many opportunities to review their work from new angles and share their approaches and interpretations with the host community.

Residencies need to be prepared to deal with unexpected occurrences, fostering creative flexibility and tenacity; these are also numerous irreplaceable experiences for the residents as well as for the hosts.

Within the many ambitious residency programs in Japan, the IAMAS Artist in Residence Program – AIR – has been showing particularly outstanding results by international standards since its implementation back when the school opened. In addition to supporting internationally successful artists and promising young talents mainly from the field of media art on their leap forward to the next level, the synergetic effect between AIR and education at the school has helped enhance the worldwide reputation of IAMAS as an educational institution.

This Ogaki-based institute focusing primarily on research and education in media art trains an elite of diverse creators.

The school promotes active communication and collaboration according to each student's personal work, research and skills, and by inviting artists to enter this compact, tight-knit community, it has created an unprecedented kind of setting for mutual creative inspiration. In exchange for providing IAMAS with theoretical and practical connections to the world by becoming part of the network, resident artists take what they have learned at IAMAS and apply it to their works and activities.

Perspectives and perceptions change, and through production and practice society and its prospects change as well... There is a need for us to recognize the potential for transformation in the world as a result of the way people meet and live, just like Joseph Beuys expanded the concept of *Kapital* from established economic value to people and society, and Pierre Klossowski developed the concept of *La Monnaie Vivante - living currency*. Not only those who explicitly postulate such shifts, but also those involved and affected are solicited to become triggers for new transformations; it is important to have incubators which accelerate this effect by providing a platform for people to meet and engage in creative work. Needless to say, the IAMAS AIR Program is one such uniquely powerful incubator for transformation.

I'm looking forward to seeing how this program continues to inspire and educate people, and instigate a great variety of programs following that model.

今、21世紀の経済や産業を担う主要なアクターとして、多様な分野におけるクリエイターたちに熱い注目が寄せられている。イギリスでは、1997年代ころよりアート、デザイン、建築、映画、音楽、メディア産業、ファッション・デザイン、コンピュータゲームなど13の分野が創造産業(クリエイティブ・インダストリー)として同国の将来の経済を担う産業として積極的に推進されている。他方、アメリカでも都市経済学者のリチャード・フロリダが2002年、「The Rise of Creative Class」を発表し、GoogleやYahooを創業したIT起業家の若者たちの働き方、発想を分析し、建築家、デザイナー、教育者、アーティスト、ミュージシャン、エンタテイナーなどクリエイティブな仕事に従事する階層を「クリエイティブ・クラス」と命名したところ、世界中から大きな反響があった。いずれも、「創造力」(Creativity)がキーワードだが、この潮流が世界各地に広まり、多くの国と地方自治体が競って施策に取り入れれ始めている。アジア域内でも中国、シンガポールなどの各国でも国家レベルでの創造産業振興策が図られており、もはやアーティストやクリエイターの存在抜きには、国家や地域、都市の未来を語ることはできなくなっている。

日本では、横浜市が先陣を切って「クリエイティブシティ・ヨコハマ」を標榜し、横浜市に映像産業やデジタル・コンテンツ系のクリエイターたちや現代アートのアーティストを誘致しての起業支援や活動支援を積極的に行っている。この背景には、重厚長大な製造業からコンテンツ産業やIT産業(いずれも創造産業に含まれる)への経済移行が起こり、従来の経済システムが大きく変化していることによる。加えて、欧米での都市再生に文化芸術が大きな役割を果たしてきているという事例も多いことから、現代では、感性や創造性といったクリエイティブな活動が地域や都市の生命線を担っていると考えられるようになってい

このような状況にあって、クリエイティブな活動の最前線に立つ人材を輩出してきたIAMASのような高等教育機関の役割は今後ますます注目されるのではないかと思う。現在、日本全国で30以上の多種多様なAIRプログラムが運営されているが、メディアアートに特化し、かつ高等教育機関で行われているのはIAMASのみではないだろうか。やはり、創造産業に力を入れているオランダでは、ライクス・アカデミー(アムステルダム)や、ヤン・ファン・アイク・アカデミー(マーストリヒト)などの芸術に特化した大学院大学ではアーティスト・イン・レジデンスというプログラムを通して、いったん大学を卒業し、ある程度経験を積んだ中堅アーティストたちがアイデアをさらに練り上げ、更なる創造の可能性を追求できる場所と時間が提供されている。また、ハーバード大学やケンブリッジ大学などでまったく異なる分野のクリエイターたちが介在することによって、異なる視点と発想をもたらす役割を期待され、大学の構内でレジデンスを行っている場合もある。

アーティストやクリエイターたちは1つの地域にとどまることなく、異なる国や文化を超えての活動、あるいは国際プロジェクトに参加することによって、キャリアにも磨きをかけ人間的にも成長してゆくのである。また、さまざまなアーティストやクリエイターたちが集まることによって常に革新的なアイデアやプロジェクトが生まれ、地域に創造的な循環をもたらす。また、異なる文化背景をもつアーティストやクリエイターたちは、そこに住む住民には発見できない都市や地域の可能性や魅力、さらに課題を可視化してみせる。

異なる文化背景、異なる芸術分野を超えるアーティスト・イン・レジデンスは、時代の先端を走るアーティストやクリエイターたちの創造の場とプロセス、実験と試行錯誤、発見と出会い、共同作業を支えるシステムとして、多くの可能性を秘めているのではないかと感じている。

Sachiko Kanno

菅野 幸子

139

Creators from diverse fields are recognized today as key actors in the economies of the 21st century. In Great Britain for example, the creative industries, defined in a total of thirteen categories which include domains such as art, design, architecture, film, media, fashion design, and computer games, are regarded as increasingly strong drivers of the national economy. The 2002 publication of urban economist Richard Florida's book *The Rise of the Creative Class* elicited strong response around the world for his analysis of the working styles and thoughts of young IT entrepreneurs who started up *Google* and *Yahoo!* among others, and his definition of a *Creative Class*. The keyword in each case is *creativity*, and now many countries and local authorities are striving to incorporate aspects of creativity into their policies.

It has become almost impossible to discuss the future of a nation, region or city without the involvement of artists and other creators.

In Japan, the city of Yokohama is taking the lead in this direction with its *Creative City Yokohama* policy, a bold support program for ventures and other activities aiming to attract contemporary artists and creative people from the digital contents industries to Yokohama.

There are countless other examples of culture and art playing central roles in urban revitalization in western countries, which suggests a common universal awareness of aesthetic and creative work as the new lifeblood of regions and cities.

Against this backdrop, I believe that the role of higher education institutions such as IAMAS, which provide education and research environments for experts on the forefront of these creative activities, will find more and more attention. Across Japan, more than thirty Artist in Residence programs are presently implemented in different shapes and scales, yet IAMAS' may very well be the only one held at a higher education institution specializing in media art.

In Holland, where creative industries are enjoying strong promotion, the Rijksakademie in Amsterdam, the Jan Van Eyck Academie in Maastricht, and other art universities offer graduates the possibility to develop their ideas in artist residency programs after gathering some real life experience as artists. Even Harvard University and the University of Cambridge have started on campus programs welcoming residents from completely different fields to step in and stimulate new perspectives and thoughts.

Exchange between people across different cultural backgrounds and artistic categories generates a constant flow of ideas, and encourages regional circulation of creativity.

The role of Artist in Residence programs is to afford a support system for creation, trial-and-error experimentation, discoveries, encounters, and collaborative work. They can also create awareness of the possibilities, attractions and problems in cities and regions that local residents are too close to see. I believe that this system is charged with immeasurable potential.

授業科目名	メディア表現研究Ⅰ	担当教員名	科目責任者：鈴木宣也 赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	研究基礎科目		
履修区分	必修	授業形態	講義
配当年次・学期	1年次前期	単位数	2単位

授業の到達目標及びテーマ

博士後期課程における研究は、学生自らが研究課題を設定し進めていく際に、メディア表現分野に求められる研究倫理に基づいたテーマと計画が必須である。論文例や研究方法、評価方法等を示しながら、論文作成に求められる研究の枠組みや解析技法をはじめとして、調査・研究手法全体を俯瞰する。特にメディア表現という視点で広く社会や世界を見つめ「問い」を立て、その問いへのアプローチ手法を検討し、結論へと計画的に描く必要がある。本授業では、博士後期課程初期段階における研究の基礎的なあり方に対する概論であり、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するための教育課程やスケジュールの確認を起点として、自身の研究テーマを確認し、研究を進めるための方法構築の全般の修得を目標とします。

授業の概要

博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、各自のテーマに基づいて進められる研究視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養い、並びに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を理解する。また、論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を修得する。なお、領域横断的に相互に深く関連するものであることから、多様な事例の修学を狙い教員がオムニバス方式で開講する。

授業計画

第1回ガイダンスと研究倫理（鈴木宣也）

博士課程の教育課程と研究スケジュールを確認する。また、研究を進めるうえで必要となる博士課程のコンプライアンスや研究倫理、行動規範を理解する。

第2回メディア表現研究のねらい（三輪真弘）

テーマに基づくメディア表現研究をより明確にイメージするため、研究の本質である「問い」と領域横断性とその再組織化について理解する。

第3回～第5回研究・分析方法の概観（金山智子・平林真実）

博士課程に求められる研究工程を具体的に想定するため、テーマの設定、仮説設定、事例・文献調査、実地調査、分析方法、評価方法を理解したうえで、自分がどのような工程で研究を進めるべきか考察する。

第6回～第8回メディア表現研究と理論化の概観（伊村靖子・鈴木宣也）

メディア表現研究に関する仮説の設定と、具体的な実践を基にした表現手法の検証など、表現研究と理論研究の相関的プロセスの過程で行われる、自らの研究の概観をまとめ、理論に裏付けされた表現について考察する。

【第9回～第15回】は、メディア表現に関する領域横断について、各担当が多様な研究事例を示し、メディア表現研究について考察する。

第9回メディア表現に関する領域横断とは（1）（赤松正行、桑久保亮太：メディアアート）
第10回メディア表現に関する領域横断とは（2）（伊村靖子、松井茂：芸術論）
第11回メディア表現に関する領域横断とは（3）（金山智子、山田晃嗣：メディアコミュニケーション）
第12回メディア表現に関する領域横断とは（4）（小林茂：イノベーションマネジメント）
第13回メディア表現に関する領域横断とは（5）（赤羽亨、鈴木宣也：インタラクショナルデザイン）
第14回メディア表現に関する領域横断とは（6）（小林孝浩、平林真実：コミュニケーションシステム）
第15回メディア表現に関する領域横断とは（7）（三輪眞弘、前田真二郎：新しい美学）

履修上の注意

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポートなど、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現研究Ⅱ	担当教員名	科目責任者：鈴木宣也 赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	研究基礎科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>博士後期課程の研究において、各自の研究を理論的に思考し客観的に文章化するために、本授業では博士後期課程初期段階における研究の進め方の理解を目的とする。また、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するため、自身の研究テーマとプロセスについて演習を通じて確認し、研究を進めるための方法構築全般の修得を目標とする。そこで(1)研究テーマと論文との関連づけ、(2)各自のテーマに基づく理論的な研究方法についての調査、(3)論文の構成についての検討、といった流れを通じ、領域横断的視点を重視しつつ、論文執筆に向けての基盤を作ることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、「メディア表現研究Ⅰ」にて修得した研究の基本的な進め方からはじめ、各自のテーマに基づく研究の視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養う。並びに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を演習を通じて理解する。メディア表現の論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を演習を通じて修得する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回ガイダンス 第2回～第3回テーマの探求・発見及び背景の調査 第4回～第5回先行研究と研究分析 第6回～第7回研究テーマと論文計画の提出と議論 第8回～第10回研究調査・分析方法、表現手法の選択と考察 第11回～第13回理論・体系化と実践計画 第14回～第15回論文構成と研究方法</p> <p>各自の研究に即した教員の研究テーマを選択し履修する。各教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>(赤羽亨)</p> <p>インタラクションデザインに焦点をあて、デザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な修得やデジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法等、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクションの記録について教授する。</p> <p>(赤松正行)</p> <p>自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考に対して、各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について教授する。</p>			

(伊村靖子)

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すため、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化とデザイン領域との接地面を教授する。

(金山智子)

高度情報メディア社会において、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて教授する。

(桑久保亮太)

メディア技術と世界の関係性を考察するため、客観的な事実認識とともに、個々人が抱える問題に積極的に目を向け、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここではメディアアートを開個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え教授する。

(小林孝浩)

情報システムの継続的な発展がもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、情報システム工学に専門の軸足を置き、それらの応用研究に関して教授する。

(小林茂)

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、経営学等の知見を参照しつつアイデアの創出から実装に至るまでの課題と手法について学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等限られた資源で実行した事例を詳細に分析し実践に向けて教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの軸に捉え、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクションデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含むデザインプロセスに関する発展研究について、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に教授する。

(平林真実)

様々なメディア及び時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムを例に、実時間性を担保した実践的な実現手法を教授する。

(前田真二郎)

デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現だけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について教授する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディアを介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

(三輪眞弘)

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究し、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズムック・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の可能性を教授する。

(山田晃嗣)

安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法を用いて、各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考え、それらをどのように現場へ取入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポート、課題等、総合的に判断する。

授業科目名	知的財産権特論	担当教員名	科目責任者：杉原長利
授業科目区分	研究基礎科目		
履修区分	選択	授業形態	講義
配当年次・学期	1年次前期	単位数	1単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>広く知的財産権全般の知識を学び、研究・制作活動と知的財産との関連や、大学・企業における知的財産権の取得・活用について理解を深めることで、知的財産制度の基礎的及び専門的知識を習得すると共に、研究者、芸術家、実務家として知っておかなければならない注意点などを習得する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>知的財産権に関する基本的な考え方や国内外の法律・制度、研究・制作活動の成果である知的財産の意義、大学・企業での先進的な知的財産の活用事例等について講義する。また、身近な発明のアイデアに基づく特許創出や、先行技術調査を学ぶ。さらに、社会で知的財産権の果たす役割を解説する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回ガイダンス／知的財産権とは 第2回特許制度 第3回特許実務 第4回知財契約実務 第5回意匠制度 第6回商標制度 第7回著作権制度 第8回著作物利用</p>			
<p>履修上の注意</p> <p>主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。</p>			
<p>テキスト</p> <p>授業に際して必要となるテキストを適宜準備する。</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>課題レポート提出およびその評価</p>			

授業科目名	プロジェクト研究Ⅰ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
授業科目区分	プロジェクト研究科目		
履修区分	必修	授業形態	実習
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースドラーニング（PBL）と研究を協調させた授業である。問題の抽象化や具体的活用、解析・設計のために欠かせない問題設定能力、問題解決能力、ディベート能力、統合力などの修得を目標とする。また、実践的な研究力の獲得と研究の効果的な活用を目指し、社会と生活にその意味と意義を記号接地させることを目指す。本授業では、社会と研究との多角的な接点を探る領域横断的なプロジェクトの企画化、プロジェクトを進めていくためのコミュニケーション力の獲得を目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースドラーニング（PBL）と研究を協調させた授業である。開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。領域横断的な視点から研究が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。社会と研究との多角的な接点を探るプロジェクトの企画力と、プロジェクトを進めていくためのコミュニケーション力の獲得を目指す。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回ガイダンス 第2回～第4回研究テーマの設定、企画立案 第5回～第9回共同・共創・共有研究先の選定とプロセス 第10回～第14回プロジェクトの進行と進捗報告 第15回研究報告会（報告書の提出） 担当教員の研究テーマを次のとおり</p> <p>(赤羽亨) インタラクティブデザインを対象とするプロトタイピングに関し、デジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法やデザインプロセス内でのインタラクションの記録をテーマとした研究を教授する。</p> <p>(赤松正行) 自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考に対して、各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術などを用いた研究を教授する。</p>			

(伊村靖子)

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータなどの表現メディアの多様化とデザイン領域との接地面をテーマに教授する。

(金山智子)

高度メディア社会における、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、新たな理論や方法論、実践から新たなコミュニケーションのあり方をテーマに教授する。

(桑久保亮太)

メディア技術と世界の関係性を考察するため、個別の問題を客観的に事実として認識し、それらを社会と接続し共有・共鳴させる方法を探求するため、問題を普遍化する活動のひとつの方策としてのメディアアートを教授する。

(小林孝浩)

情報システム工学とその応用研究として、エンターテインメント、福祉、農業について、情報システムの不可逆的な影響を省みつつ、技術のあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに教授する。

(小林茂)

経営学等におけるイノベーションマネジメントの知見を参照しつつ、実際に企画立案し遂行するためにはどうすればいいかをテーマに教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの軸に捉え、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクティブデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）などを含む広い意味のデザインに関する発展研究についてテーマとして教授する。

(平林真実)

様々なメディアおよび時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、実時間性を担保した実践的な実現手法をテーマとして教授する。

(前田真二郎)

映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現と、今日の映像表現について実践的に教授する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証しながら、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究を教授する。

(三輪眞弘)

音楽・映像・現代美術・舞台芸術などの領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究し、テクノロジーに支えられたメディア社会における表現の可能性を教授する。

(山田晃嗣)

安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法を用いて、情報技術をどのように現場へ取入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、研究報告の発表など、総合的に判断する。

授業科目名	プロジェクト研究Ⅱ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	プロジェクト研究科目		
履修区分	必修	授業形態	実習
配当年次・学期	2年次前期	単位数	2単位

授業の到達目標及びテーマ

学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースラーニング（PBL）と研究を協調させた授業である。問題の抽象化や具体化活用、解析・設計のために欠かせない問題設定能力、問題解決能力、ディベート能力、統合力などの修得を目標とする。また、実践的な研究力の獲得と研究の効果的な活用を目指し、社会と生活にその意味と意義を記号接地させることを目指す。本授業では、プロジェクトの遂行と議論を通じて領域横断力と実践力の獲得を目標とする。

授業の概要

学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを実践しながら、新たな表現拡張と理論化・体系化へつながる中心的科目として、博士論文作成に向けた実践的研究を展開する。開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。プロジェクトの遂行と議論を通じて領域横断力と実践力の獲得を目標とし、その成果をまとめることも含め実施する。

授業計画

第1回～第14回プロジェクトの進行と進捗報告

第15回研究報告会（報告書の提出）

担当教員の研究テーマを次のとおり

(赤羽亨)

インタラクシオンデザインを対象とするプロトタイピングに関し、デジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法やデザインプロセス内でのインタラクシオンの記録をテーマとした研究を教授する。

(赤松正行)

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考に対して、各種の環境感知技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術などを用いた研究を教授する。

(伊村靖子)

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータなどの表現メディアの多様化とデザイン領域との接地面をテーマに教授する。

(金山智子)

高度メディア社会における、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、新たな理論や方法論、実践から新たなコミュニケーションのあり方をテーマに教授する。

(桑久保亮太)

メディア技術と世界の関係性を考察するため、個別の問題を客観的に事実として認識し、それらを社会と接続し共有・共鳴させる方法を探求するため、問題を普遍化する活動のひとつの方策としてのメディアアートを教授する。

(小林孝浩)

情報システム工学とその応用研究として、エンターテインメント、福祉、農業について、情報システムの不可逆的な影響を省みつつ、技術のあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに教授する。

(小林茂)

経営学等におけるイノベーションマネジメントの知見を参照しつつ、実際に企画立案し遂行するためにはどうすればいいかをテーマに教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの軸に捉え、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクティブデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）などを含む広い意味のデザインに関する発展研究についてテーマとして教授する。

(平林真実)

様々なメディアおよび時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、実時間性を担保した実践的な実現手法をテーマとして教授する。

(前田真二郎)

映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現と、今日の映像表現について実践的に教授する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証しながら、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究を教授する。

(三輪真弘)

音楽・映像・現代美術・舞台芸術などの領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究し、テクノロジーに支えられたメディア社会における表現の可能性を教授する。

(山田晃嗣)

安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法を用いて、情報技術をどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、研究報告の発表など、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現特別研究Ⅰ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>博士論文・研究制作に関する指導を行いながら、(1) 研究テーマの設定・研究計画立案、(2) 論文研究・年次制作の実施、及び(3) 報告書の提出、以上、博士論文に繋げる研究テーマの設定とその研究計画の立案を通し研究の方向を定めたいうで、本格的な研究に着手することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>研究テーマ発表、年次制作・研究の実施と発表、報告書の提出から構成される。2年次の「メディア表現特別研究Ⅱ」へ向けた準備段階と位置づけられる。</p> <p>1年次当初に、入学時に提出された研究計画に基づき主指導教員と副指導教員を配置し、その後、学生の研究テーマ案を踏まえて、明確な研究テーマ設定と研究計画の立案に関する指導を行う。立案された研究計画書については、「研究計画審査」と「倫理審査」における審査を通じて、適切な助言・指導を行う。また、「プロジェクト研究Ⅰ」へ向けた計画に関する指導を行う。</p> <p>後期は、「メディア表現研究Ⅰ」における成果等を取込みつつ、学生が、主指導教員、副指導教員らと定期的に研究・制作のテーマや意図、内容や手法に関する相談と進捗状況の報告を行いながら研究を進める。最終的に年次の論文研究・制作を完了し、「博士研究状況報告会」にて発表のうえで博士研究状況報告書を提出する。なお、主指導教員は、博士論文提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回ガイダンス 第2回～第3回研究テーマ設定、研究計画立案指導 第4回～第7回研究テーマに基づく個別指導 第8回研究計画審査、倫理審査の準備 第9回～第14回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告 第15回博士研究状況報告会（報告書の提出） 指導教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>(赤羽亨) インタラクシオンデザイン インタラクシオンデザインに焦点をあて、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクシオンの記録について研究する。インタラクシオンデザインを対象とするデザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得を目論むワークショップ開発、及び、デジタルアプリケーション技術を活用したプロトタイピング手法の開発を行う。また同時に、デザインプロセス内でのインタラクシオンを記録する、多視点映像や3Dスキャナーを使ったアーカイブ手法の開発を行う。</p>			

(赤松正行) メディアアート

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考を行う。これには各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について考察することになる。ここでは特に自動化装置や造形的作品ではなく、身体と意識が密接に関わり、環境と変化に呼応する表現を志向する。

(伊村靖子) 芸術学

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すことを目的とする。その前提として、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化と、グラフィックデザイン、メディアデザインを含む、デザイン領域との接地面を考察する。

(金山智子) メディア・コミュニケーション

高度情報メディア社会において、人種、ジェンダー、宗教、政治的信念を巡って対立が生まれ、分断と衝突の時代となっている。対話や参加というコミュニケーションは善という20世紀の神話は崩れ、ネット社会では心的共振による合意や小公共圏の並存等人々の寛容や共創が困難となり、新たなコミュニケーションのあり方が問われている。授業では、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて探求する。

(桑久保亮太) メディアアート

急速な変化を遂げる情報環境において、メディア技術と世界の関係性を考察するためには、客観的な事実の認識とともに、そうした環境下で個人が抱える問題に対し積極的に目を向ける必要があり、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここでは「メディアアート」をそのような個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え、その一連の過程として、問題の発見、通時的／共時的なりサーチ、作品計画、制作と発表、自己分析までを含めた実践的な研究を行う。

(小林孝浩) 情報システム工学

情報システム工学に専門の軸足を置き、幅広いフィールドにおいて応用研究を対象とする。これまでの代表的なフィールドは、エンターテインメント分野、福祉分野、農業分野が挙げられる。情報システムの継続的な発展が我々にもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、具体的・実践的な活動を踏まえた探求をする。

(小林茂) イノベーションマネジメント

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、アイデアの創出から実装に至るまでに関する課題、理論、手法について、経営学等の知見を英語及び日本語の文献輪読を通じて研究領域全体の流れと共に学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等、各自の研究テーマに関連の深い事例を詳細に分析して参照し、研究プロジェクトとして実施するための計画を立案し、選考過程を経て学内予算を獲得することを通じて、実践のための経験を得る。

(鈴木宣也) インタラクシオンデザイン

高度な情報メディアがコミュニケーション手段の中核を占めるようになった現代社会の諸問題に対して、メディア技術とそれがもたらす影響を研究テーマの軸に捉えつつ、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクシオンデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む高度なデザインプロセスに関する発展研究を進める。また共創等を含めデザインプロセスの実践として、地域社会や産業等への還元も含め、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に研究する。

(平林真実) コミュニケーションシステム

様々なメディア及び時空間上で構成される状況におけるコミュニケーションを観察やセンシング及び機械学習等を用いた分析及び理解を通して、実世界インターフェイス、Webシステムを含むインターネット、センシング環境やIoTらの基盤としたインタラクティブなメディア技術を用いることで、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムの研究を行う。実時間性を担保したインタラクティブなシステムによって可能となるコミュニケーションによるメディア表現の在り方を実践的な適用を設定した実現手法を探求する。

(前田真二郎) 映像表現

今日、デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現の自由度を飛躍的に高めただけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について作品制作を通して実践的に研究する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂) 映像メディア学

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。本研究の目的は、オールド・メディア成熟期を分析対象に、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究である。

(三輪真弘) 新しい美学

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究する。例えば、音楽の、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の新しい可能性や困難について具体的に考察する。その際、かつて「芸術」と呼ばれてきたものが、未来の社会において、また、芸術以外の専門分野とどのような関係にあるものなのかが研究の核心となる。

(山田晃嗣) 情報工学

社会における情報の価値が高まる中、それらを安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法（ソフトコンピューティング等）が注目されている。一方で、多様な価値観を持つ現代人が生きやすい情報化社会を目指すには、個の存在を認め、皆が共生できる環境が必要である。そこで各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考える。情報技術をどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方を探求していく。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表等、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現特別研究Ⅱ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	2年次	単位数	2単位

授業の到達目標及びテーマ

博士論文・研究制作に関する指導を行いながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数人体制で学生の研究・制作の指導に当たる。

「メディア表現特別研究Ⅰ」の中で定められた研究テーマや研究計画に基づき実施した年次制作・研究、及び提出された報告書の内容を踏まえ、年度末に開催する「中間審査発表会」での研究成果のプレゼンテーションに向けて、博士論文・研究制作を進める。そして、3年次に提出する博士論文・研究制作における高度な提案への結実を目指し、自らの研究・制作をより一層発展・深化させることを目標とする。

授業の概要

研究計画に基づき論文・制作に関する研究を進めながら「中間審査発表会」へ向けて、研究成果を取りまとめる。前期、その取りまとめに当たっては、指導教員らと研究・制作のテーマ、内容、実践手法等について定期的に報告・相談を行うとともに、1年次の「プロジェクト研究Ⅰ」と、2年次に並行して取り組む「プロジェクト研究Ⅱ」の経験と成果を反映させるため、必要に応じて「プロジェクト研究Ⅰ」及び「プロジェクト研究Ⅱ」の担当教員と協議し行う。

その後は、年度末に開催する「中間審査発表会」へ向けて、研究成果としての中間発表を行い、さらに研究を深化させる。「中間審査発表会」での課題指摘や助言を踏まえて研究の改善を進め、博士課程最終学年である3年次への準備を整える。なお、主指導教員は、博士論文提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。

授業計画

第1回～第14回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告

第15回中間審査発表会

指導教員の研究テーマは次のとおり

(赤羽亨) インタラクシオンデザイン

インタラクシオンデザインに焦点をあて、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクシオンの記録について研究する。インタラクシオンデザインを対象とするデザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得を目論むワークショップ開発、及び、デジタルアプリケーション技術を活用したプロトタイピング手法の開発を行う。また同時に、デザインプロセス内でのインタラクシオンを記録する、多視点映像や3Dスキャナーを使ったアーカイブ手法の開発を行う。

☒

(赤松正行) メディアアート

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考を行う。これには各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について考察することになる。ここでは特に自動化装置や造形的作品ではなく、身体と意識が密接に関わり、環境と変化に呼応する表現を志向する。

(伊村靖子) 芸術学

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すことを目的とする。その前提として、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化と、グラフィックデザイン、メディアデザインを含む、デザイン領域との接地面を考察する。

(金山智子) メディア・コミュニケーション

高度情報メディア社会において、人種、ジェンダー、宗教、政治的信念を巡って対立が生まれ、分断と衝突の時代となっている。対話や参加というコミュニケーションは善という20世紀の神話は崩れ、ネット社会では心的共振による合意や小公共圏の並存等人々の寛容や共創が困難となり、新たなコミュニケーションのあり方が問われている。授業では、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて探求する。

(桑久保亮太) メディアアート

急速な変化を遂げる情報環境において、メディア技術と世界の関係性を考察するためには、客観的な事実の認識とともに、そうした環境下で個人が抱える問題に対し積極的に目を向ける必要があり、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここでは「メディアアート」をそのような個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え、その一連の過程として、問題の発見、通時的／共時的なリサーチ、作品計画、制作と発表、自己分析までを含めた実践的な研究を行う。

(小林孝浩) 情報システム工学

情報システム工学に専門の軸足を置き、幅広いフィールドにおいて応用研究を対象とする。これまでの代表的なフィールドは、エンターテインメント分野、福祉分野、農業分野が挙げられる。情報システムの継続的な発展が我々にもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、具体的・実践的な活動を踏まえた探求をする。

(小林茂) イノベーションマネジメント

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、アイデアの創出から実装に至るまでに関する課題、理論、手法について、経営学等の知見を英語及び日本語の文献輪読を通じて研究領域全体の流れと共に学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等、各自の研究テーマに関連の深い事例を詳細に分析して参照し、研究プロジェクトとして実施するための計画を立案し、選考過程を経て学内予算を獲得することを通じて、実践のための経験を得る。

(鈴木宣也) インタラクティブデザイン

高度な情報メディアがコミュニケーション手段の中核を占めるようになった現代社会の諸問題に対して、メディア技術とそれがもたらす影響を研究テーマの軸に捉えつつ、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクティブデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む高度なデザインプロセスに関する発展研究を進める。また共創等を含めデザインプロセスの実践として、地域社会や産業等への還元も含め、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に研究する。

(平林真実) コミュニケーションシステム

様々なメディア及び時空間上で構成される状況におけるコミュニケーションを観察やセンシング及び機械学習等を用いた分析及び理解を通して、実世界インターフェイス、Webシステムを含むインターネット、センシング環境やIoTらの基盤としたインタラクティブなメディア技術を用いることで、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムの研究を行う。実時間性を担保したインタラクティブなシステムによって可能となるコミュニケーションによるメディア表現の在り方を実践的な適用を設定した実現手法を探求する。

(前田真二郎) 映像表現

今日、デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現の自由度を飛躍的に高めただけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について作品制作を通して実践的に研究する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂) 映像メディア学

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。本研究の目的は、オールド・メディア成熟期を分析対象に、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究である。

(三輪真弘) 新しい美学

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究する。例えば、音楽の、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の新しい可能性や困難について具体的に考察する。その際、かつて「芸術」と呼ばれてきたものが、未来の社会において、また、芸術以外の専門分野とどのような関係にあるものなのかが研究の核心となる。

(山田晃嗣) 情報工学

社会における情報の価値が高まる中、それらを安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法（ソフトコンピューティング等）が注目されている。一方で、多様な価値観を持つ現代人が生きやすい情報化社会を目指すには、個の存在を認め、皆が共生できる環境が必要である。そこで各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考える。情報技術をどのように現場へ取入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方を探求していく。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表等、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現特別研究III	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	3年次	単位数	4単位

授業の到達目標及びテーマ

博士論文・研究制作に関する指導を行いながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数人体制で学生の研究・制作の指導に当たる。

「メディア表現特別研究Ⅰ・Ⅱ」において実施した年次制作・研究、提出された報告書、中間審査発表会の内容・成果を踏まえて、後期の「博士論文予備審査会」、「博士論文審査会」へ向けて、博士論文・研究制作を進める。そして、自らの研究・制作を領域横断的視点から既存の価値観にとらわれない学術的・社会的に大きな価値を持つ博士論文として研究成果の結実を目標とする。

授業の概要

博士研究の最終年度として、博士論文を提出し、後期の「博士論文予備審査会」、「博士論文審査会」を通じた指導・助言に対応しながら、研究成果としてまとめる。

前期は、研究計画に基づき論文・制作に関する研究を進めながら、「博士論文予備審査会」に向けて、研究成果を取りまとめる。後期は、「博士論文審査会」に向けて、指導教員らによる定期的な指導のもと、博士論文を完成させる。併せて、研究制作を伴う場合は、同様に指導教員のもとで並行して制作を進める。履修者は、指導教員と定期的な報告・相談を行いながら、3年間の全ての授業の成果を持って博士論文を完成させ、審査・発表に臨む。

授業計画

- 第1回～第10回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
 - 第11回～第14回博士論文の執筆、研究制作の進捗チェック
 - 第15回博士論文予備審査会での発表
 - 第16回～第19回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
 - 第20回博士論文審査委員会への博士論文及び研究制作の準備
 - 第21回～第24回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
 - 第25回～第30回博士論文審査会に向けた最終調整
- 指導教員の研究テーマは次のとおり

(赤羽亨) インタラクシオンデザイン

インタラクシオンデザインに焦点をあて、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクシオンの記録について研究する。インタラクシオンデザインを対象とするデザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイプング」に関連して、メディア表現技術の体系的な修得を目的ワークショップ開発、及び、デジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイプング手法の開発を行う。また同時に、デザインプロセス内でのインタラクシオンを記録する、多視点映像や3Dスキャナーを使ったアーカイブ手法の開発を行う。

☒

(赤松正行) メディアアート

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考を行う。これには各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について考察することになる。ここでは特に自動化装置や造形的作品ではなく、身体と意識が密接に関わり、環境と変化に呼応する表現を志向する。

(伊村靖子) 芸術学

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すことを目的とする。その前提として、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化と、グラフィックデザイン、メディアデザインを含む、デザイン領域との接地面を考察する。

(金山智子) メディア・コミュニケーション

高度情報メディア社会において、人種、ジェンダー、宗教、政治的信念を巡って対立が生まれ、分断と衝突の時代となっている。対話や参加というコミュニケーションは善という20世紀の神話は崩れ、ネット社会では心的共振による合意や小公共圏の並存等人々の寛容や共創が困難となり、新たなコミュニケーションのあり方が問われている。授業では、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて探求する。

(桑久保亮太) メディアアート

急速な変化を遂げる情報環境において、メディア技術と世界の関係性を考察するためには、客観的な事実の認識とともに、そうした環境下で個人が抱える問題に対し積極的に目を向ける必要があり、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここでは「メディアアート」をそのような個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え、その一連の過程として、問題の発見、通時的／共時的なりサーチ、作品計画、制作と発表、自己分析までを含めた実践的な研究を行う。

(小林孝浩) 情報システム工学

情報システム工学に専門の軸足を置き、幅広いフィールドにおいて応用研究を対象とする。これまでの代表的なフィールドは、エンターテインメント分野、福祉分野、農業分野が挙げられる。情報システムの継続的な発展が我々にもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、具体的・実践的な活動を踏まえた探求をする。

(小林茂) イノベーションマネジメント

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、アイデアの創出から実装に至るまでに関する課題、理論、手法について、経営学等の知見を英語及び日本語の文献輪読を通じて研究領域全体の流れと共に学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等、各自の研究テーマに関連の深い事例を詳細に分析して参照し、研究プロジェクトとして実施するための計画を立案し、選考過程を経て学内予算を獲得することを通じて、実践のための経験を得る。

(鈴木宣也) インタラクシオンデザイン

高度な情報メディアがコミュニケーション手段の中核を占めるようになった現代社会の諸問題に対して、メディア技術とそれがもたらす影響を研究テーマの軸に捉えつつ、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクシオンデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む高度なデザインプロセスに関する発展研究を進める。また共創等を含めデザインプロセスの実践として、地域社会や産業等への還元も含め、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に研究する。

(平林真実) コミュニケーションシステム

様々なメディア及び時空間上で構成される状況におけるコミュニケーションを観察やセンシング及び機械学習等を用いた分析及び理解を通して、実世界インターフェイス、Webシステムを含むインターネット、センシング環境やIoTらの基盤としたインタラクティブなメディア技術を用いることで、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムの研究を行う。実時間性を担保したインタラクティブなシステムによって可能となるコミュニケーションによるメディア表現の在り方を実践的な適用を設定した実現手法を探求する。

(前田真二郎) 映像表現

今日、デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現の自由度を飛躍的に高めただけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について作品制作を通して実践的に研究する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂) 映像メディア学

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。本研究の目的は、オールド・メディア成熟期を分析対象に、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究である。

(三輪真弘) 新しい美学

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究する。例えば、音楽の、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の新しい可能性や困難について具体的に考察する。その際、かつて「芸術」と呼ばれてきたものが、未来の社会において、また、芸術以外の専門分野とどのような関係にあるものなのかが研究の核心となる。

(山田晃嗣) 情報工学

社会における情報の価値が高まる中、それらを安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法（ソフトコンピューティング等）が注目されている。一方で、多様な価値観を持つ現代人が生きやすい情報化社会を目指すには、個の存在を認め、皆が共生できる環境が必要である。そこで各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考える。情報技術をどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方を探求していく。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表等、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現研究Ⅰ	担当教員名	科目責任者：鈴木宣也 赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	研究基礎科目		
履修区分	必修	授業形態	講義
配当年次・学期	1年次前期	単位数	2単位

授業の到達目標及びテーマ

博士後期課程における研究は、学生自らが研究課題を設定し進めていく際に、メディア表現分野に求められる研究倫理に基づいたテーマと計画が必須である。論文例や研究方法、評価方法等を示しながら、論文作成に求められる研究の枠組みや解析技法をはじめとして、調査・研究手法全体を俯瞰する。特にメディア表現という視点で広く社会や世界を見つめ「問い」を立て、その問いへのアプローチ手法を検討し、結論へと計画的に描く必要がある。本授業では、博士後期課程初期段階における研究の基礎的なあり方に対する概論であり、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するための教育課程やスケジュールの確認を起点として、自身の研究テーマを確認し、研究を進めるための方法構築の全般の修得を目標とします。

授業の概要

博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、各自のテーマに基づいて進められる研究視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養い、並びに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を理解する。また、論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を修得する。なお、領域横断的に相互に深く関連するものであることから、多様な事例の修学を狙い教員がオムニバス方式で開講する。

授業計画

第1回ガイダンスと研究倫理（鈴木宣也）

博士課程の教育課程と研究スケジュールを確認する。また、研究を進めるうえで必要となる博士課程のコンプライアンスや研究倫理、行動規範を理解する。

第2回メディア表現研究のねらい（三輪真弘）

テーマに基づくメディア表現研究をより明確にイメージするため、研究の本質である「問い」と領域横断性とその再組織化について理解する。

第3回～第5回研究・分析方法の概観（金山智子・平林真実）

博士課程に求められる研究工程を具体的に想定するため、テーマの設定、仮説設定、事例・文献調査、実地調査、分析方法、評価方法を理解したうえで、自分がどのような工程で研究を進めるべきか考察する。

第6回～第8回メディア表現研究と理論化の概観（伊村靖子・鈴木宣也）

メディア表現研究に関する仮説の設定と、具体的な実践を基にした表現手法の検証など、表現研究と理論研究の相関的プロセスの過程で行われる、自らの研究の概観をまとめ、理論に裏付けされた表現について考察する。

【第9回～第15回】は、メディア表現に関する領域横断について、各担当が多様な研究事例を示し、メディア表現研究について考察する。

第9回メディア表現に関する領域横断とは（1）（赤松正行、桑久保亮太：メディアアート）
第10回メディア表現に関する領域横断とは（2）（伊村靖子、松井茂：芸術論）
第11回メディア表現に関する領域横断とは（3）（金山智子、山田晃嗣：メディアコミュニケーション）
第12回メディア表現に関する領域横断とは（4）（小林茂：イノベーションマネジメント）
第13回メディア表現に関する領域横断とは（5）（赤羽亨、鈴木宣也：インタラクショナルデザイン）
第14回メディア表現に関する領域横断とは（6）（小林孝浩、平林真実：コミュニケーションシステム）
第15回メディア表現に関する領域横断とは（7）（三輪眞弘、前田真二郎：新しい美学）

履修上の注意

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポートなど、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現研究Ⅱ	担当教員名	科目責任者：鈴木宣也 赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	研究基礎科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>博士後期課程の研究において、各自の研究を理論的に思考し客観的に文章化するために、本授業では博士後期課程初期段階における研究の進め方の理解を目的とする。また、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するため、自身の研究テーマとプロセスについて演習を通じて確認し、研究を進めるための方法構築全般の修得を目標とする。そこで(1)研究テーマと論文との関連づけ、(2)各自のテーマに基づく理論的な研究方法についての調査、(3)論文の構成についての検討、といった流れを通じ、領域横断的視点を重視しつつ、論文執筆に向けての基盤を作ることを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、「メディア表現研究Ⅰ」にて修得した研究の基本的な進め方からはじめ、各自のテーマに基づく研究の視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養う。並びに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を演習を通じて理解する。メディア表現の論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を演習を通じて修得する。</p>			
授業計画			
<p>第1回ガイダンス 第2回～第3回テーマの探求・発見及び背景の調査 第4回～第5回先行研究と研究分析 第6回～第7回研究テーマと論文計画の提出と議論 第8回～第10回研究調査・分析方法、表現手法の選択と考察 第11回～第13回理論・体系化と実践計画 第14回～第15回論文構成と研究方法 各自の研究に即した教員の研究テーマを選択し履修する。各教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>(赤羽亨) インタラクションデザインに焦点をあて、デザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な修得やデジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法等、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクションの記録について教授する。</p> <p>(赤松正行) 自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考に対して、各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について教授する。</p>			

(伊村靖子)

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すため、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化とデザイン領域との接地面を教授する。

(金山智子)

高度情報メディア社会において、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて教授する。

(桑久保亮太)

メディア技術と世界の関係性を考察するため、客観的な事実認識とともに、個々人が抱える問題に積極的に目を向け、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここではメディアアートを開個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え教授する。

(小林孝浩)

情報システムの継続的な発展がもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、情報システム工学に専門の軸足を置き、それらの応用研究に関して教授する。

(小林茂)

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、経営学等の知見を参照しつつアイデアの創出から実装に至るまでの課題と手法について学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等限られた資源で実行した事例を詳細に分析し実践に向けて教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの軸に捉え、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクティブデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含むデザインプロセスに関する発展研究について、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に教授する。

(平林真実)

様々なメディア及び時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムを例に、実時間性を担保した実践的な実現手法を教授する。

(前田真二郎)

デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現だけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について教授する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディアを介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

(三輪眞弘)

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究し、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズムック・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の可能性を教授する。

(山田晃嗣)

安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法を用いて、各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考え、それらをどのように現場へ取入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポート、課題等、総合的に判断する。

授業科目名	プロジェクト研究Ⅰ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	プロジェクト研究科目		
履修区分	必修	授業形態	実習
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースドラニング（PBL）と研究を協調させた授業である。問題の抽象化や具体的活用、解析・設計のために欠かせない問題設定能力、問題解決能力、ディベート能力、統合力等の修得を目標とする。また、実践的な研究力の獲得と研究の効果的な活用を目指し、社会と生活にその意味と意義を記号接地させることを目指す。本授業では、社会と研究との多角的な接点を探る領域横断的なプロジェクトの企画化、プロジェクトを進めていくためのコミュニケーション力の獲得を目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>新たな表現拡張と理論化・体系化につながる中心的科目として配置し、博士論文作成に向けた実践的研究を展開する。プロジェクトベースドラニング（PBL）とチームティーチングによる、領域横断的なテーマを持ち、開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。学生が行う研究もまた、領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回ガイダンス 第2回～第4回研究テーマの設定、企画立案 第5回～第9回共同・共創・共有研究先の選定とプロセス 第10回～第14回プロジェクトの進行と進捗報告 第15回研究報告会（報告書の提出） 担当教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>(赤羽亨) インタラクティブデザインを対象とするプロトタイピングに関し、デジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法やデザインプロセス内でのインタラクションの記録をテーマとした研究を教授する。</p> <p>(赤松正行) 自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考に対して、各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用いた研究を教授する。</p>			

(伊村靖子)

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化とデザイン領域との接地面をテーマに教授する。

(金山智子)

高度メディア社会における、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、新たな理論や方法論、実践から新たなコミュニケーションのあり方をテーマに教授する。

(桑久保亮太)

メディア技術と世界の関係性を考察するため、個別の問題を客観的に事実として認識し、それらを社会と接続し共有・共鳴させる方法を探求するため、問題を普遍化する活動のひとつの方策としてのメディアアートを教授する。

(小林孝浩)

情報システム工学とその応用研究として、エンターテインメント、福祉、農業について、情報システムの不可逆的な影響を省みつつ、技術のあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに教授する。

(小林茂)

経営学等におけるイノベーションマネジメントの知見を参照しつつ、実際に企画立案し遂行するためにはどうすればいいかをテーマに教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの軸に捉え、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクションデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む広い意味のデザインに関する発展研究についてテーマとして教授する。

(平林真実)

様々なメディア及び時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、実時間性を担保した実践的な実現手法をテーマとして教授する。

(前田真二郎)

映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現と、今日の映像表現について実践的に教授する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証しながら、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究を教授する。

(三輪眞弘)

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究し、テクノロジーに支えられたメディア社会における表現の可能性を教授する。

(山田晃嗣)

安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法を用いて、情報技術をどのように現場へ取入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、研究報告の発表等、総合的に判断する。

授業科目名	プロジェクト研究Ⅱ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	プロジェクト研究科目		
履修区分	必修	授業形態	実習
配当年次・学期	2年次前期	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースラーニング（PBL）と研究を協調させた授業である。問題の抽象化や具体化活用、解析・設計のために欠かせない問題設定能力、問題解決能力、ディベート能力、統合力等の修得を目標とする。また、実践的な研究力の獲得と研究の効果的な活用を目指し、社会と生活にその意味と意義を記号接地させることを目指す。本授業では、プロジェクトの遂行と議論を通じて領域横断力と実践力の獲得を目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>新たな表現拡張と理論化・体系化につながる中心的科目として配置し、博士論文作成に向けた実践的研究を展開する。プロジェクトベースラーニング（PBL）とチームティーチングによる、領域横断的なテーマを持ち、開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。学生が行う研究もまた、領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回～第14回プロジェクトの進行と進捗報告 第15回研究報告会（報告書の提出） 担当教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>(赤羽亨) インタラクティブデザインを対象とするプロトタイピングに関し、デジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法やデザインプロセス内でのインタラクティブの記録をテーマとした研究を教授する。</p> <p>(赤松正行) 自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考に対して、各種の環境感知技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用いた研究を教授する。</p> <p>(伊村靖子) メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化とデザイン領域との接地面をテーマに教授する。</p>			

(金山智子)

高度メディア社会における、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、新たな理論や方法論、実践から新たなコミュニケーションのあり方をテーマに教授する。

(桑久保亮太)

メディア技術と世界の関係性を考察するため、個別の問題を客観的に事実として認識し、それらを社会と接続し共有・共鳴させる方法を探求するため、問題を普遍化する活動のひとつの方策としてのメディアアートを教授する。

(小林孝浩)

情報システム工学とその応用研究として、エンターテインメント、福祉、農業について、情報システムの不可逆的な影響を省みつつ、技術のあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに教授する。

(小林茂)

経営学等におけるイノベーションマネジメントの知見を参照しつつ、実際に企画立案し遂行するためにはどうすればいいかをテーマに教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの軸に捉え、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクティブデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む広い意味のデザインに関する発展研究についてテーマとして教授する。

(平林真実)

様々なメディアおよび時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、実時間性を担保した実践的な実現手法をテーマとして教授する。

(前田真二郎)

映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現と、今日の映像表現について実践的に教授する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証しながら、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究を教授する。

(三輪真弘)

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究し、テクノロジーに支えられたメディア社会における表現の可能性を教授する。

(山田晃嗣)

安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法を用いて、情報技術をどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、研究報告の発表等、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現特別研究Ⅰ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>博士論文・研究制作に関する指導を行いながら、(1) 研究テーマの設定・研究計画立案、(2) 論文研究・年次制作の実施、及び(3) 報告書の提出、以上、博士論文に繋げる研究テーマの設定とその研究計画の立案を通し研究の方向を定めたいうで、本格的な研究に着手することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>研究テーマ発表、年次制作・研究の実施と発表、報告書の提出から構成される。2年次の「メディア表現特別研究Ⅱ」へ向けた準備段階と位置づけられる。</p> <p>1年次当初に、入学時に提出された研究計画に基づき主指導教員と副指導教員を配置し、その後、学生の研究テーマ案を踏まえて、明確な研究テーマ設定と研究計画の立案に関する指導を行う。立案された研究計画書については、「研究計画審査」と「倫理審査」における審査を通じて、適切な助言・指導を行う。また、「プロジェクト研究Ⅰ」へ向けた計画に関する指導を行う。</p> <p>後期は、「メディア表現研究Ⅰ」における成果等を取込みつつ、学生が、主指導教員、副指導教員らと定期的に研究・制作のテーマや意図、内容や手法に関する相談と進捗状況の報告を行いながら研究を進める。最終的に年次の論文研究・制作を完了し、「博士研究状況報告会」にて発表のうえで博士研究状況報告書を提出する。なお、主指導教員は、博士論文提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回ガイダンス 第2回～第3回研究テーマ設定、研究計画立案指導 第4回～第7回研究テーマに基づく個別指導 第8回研究計画審査、倫理審査の準備 第9回～第14回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告 第15回博士研究状況報告会（報告書の提出） 指導教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>(赤羽亨) インタラクシオンデザイン インタラクシオンデザインに焦点をあて、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクシオンの記録について研究する。インタラクシオンデザインを対象とするデザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得を目論むワークショップ開発、及び、デジタルアプリケーション技術を活用したプロトタイピング手法の開発を行う。また同時に、デザインプロセス内でのインタラクシオンを記録する、多視点映像や3Dスキャナーを使ったアーカイブ手法の開発を行う。</p>			

(赤松正行) メディアアート

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考を行う。これには各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について考察することになる。ここでは特に自動化装置や造形的作品ではなく、身体と意識が密接に関わり、環境と変化に呼応する表現を志向する。

(伊村靖子) 芸術学

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すことを目的とする。その前提として、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化と、グラフィックデザイン、メディアデザインを含む、デザイン領域との接地面を考察する。

(金山智子) メディア・コミュニケーション

高度情報メディア社会において、人種、ジェンダー、宗教、政治的信念を巡って対立が生まれ、分断と衝突の時代となっている。対話や参加というコミュニケーションは善という20世紀の神話は崩れ、ネット社会では心的共振による合意や小公共圏の並存等人々の寛容や共創が困難となり、新たなコミュニケーションのあり方が問われている。授業では、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて探求する。

(桑久保亮太) メディアアート

急速な変化を遂げる情報環境において、メディア技術と世界の関係性を考察するためには、客観的な事実の認識とともに、そうした環境下で個人が抱える問題に対し積極的に目を向ける必要があり、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここでは「メディアアート」をそのような個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え、その一連の過程として、問題の発見、通時的／共時的なりサーチ、作品計画、制作と発表、自己分析までを含めた実践的な研究を行う。

(小林孝浩) 情報システム工学

情報システム工学に専門の軸足を置き、幅広いフィールドにおいて応用研究を対象とする。これまでの代表的なフィールドは、エンターテインメント分野、福祉分野、農業分野が挙げられる。情報システムの継続的な発展が我々にもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、具体的・実践的な活動を踏まえた探求をする。

(小林茂) イノベーションマネジメント

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、アイデアの創出から実装に至るまでに関する課題、理論、手法について、経営学等の知見を英語及び日本語の文献輪読を通じて研究領域全体の流れと共に学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等、各自の研究テーマに関連の深い事例を詳細に分析して参照し、研究プロジェクトとして実施するための計画を立案し、選考過程を経て学内予算を獲得することを通じて、実践のための経験を得る。

(鈴木宣也) インタラクシオンデザイン

高度な情報メディアがコミュニケーション手段の中核を占めるようになった現代社会の諸問題に対して、メディア技術とそれがもたらす影響を研究テーマの軸に捉えつつ、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクシオンデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む高度なデザインプロセスに関する発展研究を進める。また共創等を含めデザインプロセスの実践として、地域社会や産業等への還元も含め、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に研究する。

(平林真実) コミュニケーションシステム

様々なメディア及び時空間上で構成される状況におけるコミュニケーションを観察やセンシング及び機械学習等を用いた分析及び理解を通して、実世界インターフェイス、Webシステムを含むインターネット、センシング環境やIoTらの基盤としたインタラクティブなメディア技術を用いることで、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムの研究を行う。実時間性を担保したインタラクティブなシステムによって可能となるコミュニケーションによるメディア表現の在り方を実践的な適用を設定した実現手法を探求する。

(前田真二郎) 映像表現

今日、デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現の自由度を飛躍的に高めただけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について作品制作を通して実践的に研究する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂) 映像メディア学

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。本研究の目的は、オールド・メディア成熟期を分析対象に、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究である。

(三輪真弘) 新しい美学

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究する。例えば、音楽の、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の新しい可能性や困難について具体的に考察する。その際、かつて「芸術」と呼ばれてきたものが、未来の社会において、また、芸術以外の専門分野とどのような関係にあるものなのかが研究の核心となる。

(山田晃嗣) 情報工学

社会における情報の価値が高まる中、それらを安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法（ソフトコンピューティング等）が注目されている。一方で、多様な価値観を持つ現代人が生きやすい情報化社会を目指すには、個の存在を認め、皆が共生できる環境が必要である。そこで各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考える。情報技術をどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方を探求していく。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表等、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現特別研究Ⅱ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪真弘、山田晃嗣
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	2年次	単位数	2単位

授業の到達目標及びテーマ

博士論文・研究制作に関する指導を行いながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数人体制で学生の研究・制作の指導に当たる。

「メディア表現特別研究Ⅰ」の中で定められた研究テーマや研究計画に基づき実施した年次制作・研究、及び提出された報告書の内容を踏まえ、年度末に開催する「中間審査発表会」での研究成果のプレゼンテーションに向けて、博士論文・研究制作を進める。そして、3年次に提出する博士論文・研究制作における高度な提案への結実を目指し、自らの研究・制作をより一層発展・深化させることを目標とする。

授業の概要

研究計画に基づき論文・制作に関する研究を進めながら「中間審査発表会」へ向けて、研究成果を取りまとめる。前期、その取りまとめに当たっては、指導教員らと研究・制作のテーマ、内容、実践手法等について定期的に報告・相談を行うとともに、1年次の「プロジェクト研究Ⅰ」と、2年次に並行して取り組む「プロジェクト研究Ⅱ」の経験と成果を反映させるため、必要に応じて「プロジェクト研究Ⅰ」及び「プロジェクト研究Ⅱ」の担当教員と協議し行う。

その後は、年度末に開催する「中間審査発表会」へ向けて、研究成果としての中間発表を行い、さらに研究を深化させる。「中間審査発表会」での課題指摘や助言を踏まえて研究の改善を進め、博士課程最終学年である3年次への準備を整える。なお、主指導教員は、博士論文提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。

授業計画

第1回～第14回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告

第15回中間審査発表会

指導教員の研究テーマは次のとおり

(赤羽亨) インタラクシオンデザイン

インタラクシオンデザインに焦点をあて、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクシオンの記録について研究する。インタラクシオンデザインを対象とするデザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得を目論むワークショップ開発、及び、デジタルアプリケーション技術を活用したプロトタイピング手法の開発を行う。また同時に、デザインプロセス内でのインタラクシオンを記録する、多視点映像や3Dスキャナーを使ったアーカイブ手法の開発を行う。

☒

(赤松正行) メディアアート

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考を行う。これには各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について考察することになる。ここでは特に自動化装置や造形的作品ではなく、身体と意識が密接に関わり、環境と変化に呼応する表現を志向する。

(伊村靖子) 芸術学

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すことを目的とする。その前提として、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化と、グラフィックデザイン、メディアデザインを含む、デザイン領域との接地面を考察する。

(金山智子) メディア・コミュニケーション

高度情報メディア社会において、人種、ジェンダー、宗教、政治的信念を巡って対立が生まれ、分断と衝突の時代となっている。対話や参加というコミュニケーションは善という20世紀の神話は崩れ、ネット社会では心的共振による合意や小公共圏の並存等人々の寛容や共創が困難となり、新たなコミュニケーションのあり方が問われている。授業では、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて探求する。

(桑久保亮太) メディアアート

急速な変化を遂げる情報環境において、メディア技術と世界の関係性を考察するためには、客観的な事実の認識とともに、そうした環境下で個人が抱える問題に対し積極的に目を向ける必要があり、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここでは「メディアアート」をそのような個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え、その一連の過程として、問題の発見、通時的／共時的なリサーチ、作品計画、制作と発表、自己分析までを含めた実践的な研究を行う。

(小林孝浩) 情報システム工学

情報システム工学に専門の軸足を置き、幅広いフィールドにおいて応用研究を対象とする。これまでの代表的なフィールドは、エンターテインメント分野、福祉分野、農業分野が挙げられる。情報システムの継続的な発展が我々にもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、具体的・実践的な活動を踏まえた探求をする。

(小林茂) イノベーションマネジメント

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、アイデアの創出から実装に至るまでに関する課題、理論、手法について、経営学等の知見を英語及び日本語の文献輪読を通じて研究領域全体の流れと共に学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等、各自の研究テーマに関連の深い事例を詳細に分析して参照し、研究プロジェクトとして実施するための計画を立案し、選考過程を経て学内予算を獲得することを通じて、実践のための経験を得る。

(鈴木宣也) インタラクショナルデザイン

高度な情報メディアがコミュニケーション手段の中核を占めるようになった現代社会の諸問題に対して、メディア技術とそれがもたらす影響を研究テーマの軸に捉えつつ、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクショナルデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む高度なデザインプロセスに関する発展研究を進める。また共創等を含めデザインプロセスの実践として、地域社会や産業等への還元も含め、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に研究する。

(平林真実) コミュニケーションシステム

様々なメディア及び時空間上で構成される状況におけるコミュニケーションを観察やセンシング及び機械学習等を用いた分析及び理解を通して、実世界インターフェイス、Webシステムを含むインターネット、センシング環境やIoTらの基盤としたインタラクティブなメディア技術を用いることで、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムの研究を行う。実時間性を担保したインタラクティブなシステムによって可能となるコミュニケーションによるメディア表現の在り方を実践的な適用を設定した実現手法を探求する。

(前田真二郎) 映像表現

今日、デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現の自由度を飛躍的に高めただけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について作品制作を通して実践的に研究する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂) 映像メディア学

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。本研究の目的は、オールド・メディア成熟期を分析対象に、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究である。

(三輪真弘) 新しい美学

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究する。例えば、音楽の、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の新しい可能性や困難について具体的に考察する。その際、かつて「芸術」と呼ばれてきたものが、未来の社会において、また、芸術以外の専門分野とどのような関係にあるものなのかが研究の核心となる。

(山田晃嗣) 情報工学

社会における情報の価値が高まる中、それらを安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法（ソフトコンピューティング等）が注目されている。一方で、多様な価値観を持つ現代人が生きやすい情報化社会を目指すには、個の存在を認め、皆が共生できる環境が必要である。そこで各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考える。情報技術をどのように現場へ取入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方を探求していく。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表等、総合的に判断する。

授業科目名	メディア表現特別研究Ⅲ	担当教員名	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	3年次	単位数	4単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>博士論文・研究制作に関する指導を行いながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数人体制で学生の研究・制作の指導に当たる。</p> <p>「メディア表現特別研究Ⅰ・Ⅱ」において実施した年次制作・研究、提出された報告書、中間審査発表会の内容・成果を踏まえて、後期の「博士論文予備審査会」、「博士論文審査会」へ向けて、博士論文・研究制作を進める。そして、自らの研究・制作を領域横断的視点から既存の価値観にとらわれない学術的・社会的に大きな価値を持つ博士論文として研究成果の結実を目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>博士研究の最終年度として、博士論文を提出し、後期の「博士論文予備審査会」、「博士論文審査会」を通じた指導・助言に対応しながら、研究成果としてまとめる。</p> <p>前期は、研究計画に基づき論文・制作に関する研究を進めながら、「博士論文予備審査会」に向けて、研究成果を取りまとめる。後期は、「博士論文審査会」に向けて、指導教員らによる定期的な指導のもと、博士論文を完成させる。併せて、研究制作を伴う場合は、同様に指導教員のもとで並行して制作を進める。履修者は、指導教員と定期的な報告・相談を行いながら、3年間の全ての授業の成果を持って博士論文を完成させ、審査・発表に臨む。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回～第10回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告 第11回～第14回博士論文の執筆、研究制作の進捗チェック 第15回博士論文予備審査会での発表 第16回～第19回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告 第20回博士論文審査委員会への博士論文及び研究制作の準備 第21回～第24回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告 第25回～第30回博士論文審査会に向けた最終調整</p> <p>指導教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>(赤羽亨) インタラクシオンデザイン インタラクシオンデザインに焦点をあて、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクシオンの記録について研究する。インタラクシオンデザインを対象とするデザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な修得を目的ワークショップ開発、及び、デジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法の開発を行う。また同時に、デザインプロセス内でのインタラクシオンを記録する、多視点映像や3Dスキャナーを使ったアーカイブ手法の開発を行う。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/></p>			

(赤松正行) メディアアート

自転車を始めとする自律的な移動を主題としてテクノロジーとアートを融合させた実践的な調査・制作と発見的な批評・論考を行う。これには各種の環境感応技術、拡張現実感技術、映像音響体感技術等を用い、個人の身体性や創造性、社会の交換性や持続性、自然と機械の相互作用性や創発性等について考察することになる。ここでは特に自動化装置や造形的作品ではなく、身体と意識が密接に関わり、環境と変化に呼応する表現を志向する。

(伊村靖子) 芸術学

メディア技術がもたらす表現の構造変化に対する批評や観衆論を背景とした作品論を通じて、1990年代以降の芸術表現史の枠組みを問い直すことを目的とする。その前提として、現代芸術における写真、映像、印刷、通信、コンピュータ等の表現メディアの多様化と、グラフィックデザイン、メディアデザインを含む、デザイン領域との接地面を考察する。

(金山智子) メディア・コミュニケーション

高度情報メディア社会において、人種、ジェンダー、宗教、政治的信念を巡って対立が生まれ、分断と衝突の時代となっている。対話や参加というコミュニケーションは善という20世紀の神話は崩れ、ネット社会では心的共振による合意や小公共圏の並存等人々の寛容や共創が困難となり、新たなコミュニケーションのあり方が問われている。授業では、他者との関係や意味の構築プロセスを（不）可能とするコミュニケーションを規定する媒介・場としてメディアを捉え、既存のメディアコミュニケーション論を現代社会の中で相対化し、新たな理論や方法論、メディア実践からこの問いについて探求する。

(桑久保亮太) メディアアート

急速な変化を遂げる情報環境において、メディア技術と世界の関係性を考察するためには、客観的な事実の認識とともに、そうした環境下で個人々が抱える問題に対し積極的に目を向ける必要があり、尚且つそれを社会に接続することで共有・共鳴させる方法を具体的に探求することが求められる。ここでは「メディアアート」をそのような個別の問題を普遍化する活動のひとつの方策として捉え、その一連の過程として、問題の発見、通時的／共時的なりサーチ、作品計画、制作と発表、自己分析までを含めた実践的な研究を行う。

(小林孝浩) 情報システム工学

情報システム工学に専門の軸足を置き、幅広いフィールドにおいて応用研究を対象とする。これまでの代表的なフィールドは、エンターテインメント分野、福祉分野、農業分野が挙げられる。情報システムの継続的な発展が我々にもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、具体的・実践的な活動を踏まえた探求をする。

(小林茂) イノベーションマネジメント

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、アイデアの創出から実装に至るまでに関する課題、理論、手法について、経営学等の知見を英語及び日本語の文献輪読を通じて研究領域全体の流れと共に学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティスト等、各自の研究テーマに関連の深い事例を詳細に分析して参照し、研究プロジェクトとして実施するための計画を立案し、選考過程を経て学内予算を獲得することを通じて、実践のための経験を得る。

(鈴木宣也) インタラクシオンデザイン

高度な情報メディアがコミュニケーション手段の中核を占めるようになった現代社会の諸問題に対して、メディア技術とそれがもたらす影響を研究テーマの軸に捉えつつ、ビジュアルリテラシー（創造）やインタラクシオンデザイン（設計）、プロトタイピング（実践）等を含む高度なデザインプロセスに関する発展研究を進める。また共創等を含めデザインプロセスの実践として、地域社会や産業等への還元も含め、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に研究する。

(平林真実) コミュニケーションシステム

様々なメディア及び時空間上で構成される状況におけるコミュニケーションを観察やセンシング及び機械学習等を用いた分析及び理解を通して、実世界インターフェイス、Webシステムを含むインターネット、センシング環境やIoTらの基盤としたインタラクティブなメディア技術を用いることで、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムの研究を行う。実時間性を担保したインタラクティブなシステムによって可能となるコミュニケーションによるメディア表現の在り方を実践的な適用を設定した実現手法を探求する。

(前田真二郎) 映像表現

今日、デジタル技術と結びついた「映像」は、従来の映像表現の自由度を飛躍的に高めただけでなく、印刷や通信等のメディア環境や、美術や舞台といった芸術分野に大きな影響を及ぼしている。映像の発信／鑑賞形態の変化が生んだ新たな視覚文化を見据えながら、新旧の映像メディアに関する技術や表現を整理し、今日の映像表現について作品制作を通して実践的に研究する。また創作者の経験を共有可能な知識に還元し、表現手法や基盤技術を開拓する。

(松井茂) 映像メディア学

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。本研究の目的は、オールド・メディア成熟期を分析対象に、ニュー・メディア成熟期を経た表現への批判理論の確立を意図した基礎研究である。

(三輪真弘) 新しい美学

音楽・映像・現代美術・舞台芸術等の領域をまとめて「メディアアート」ととらえ、現代社会における芸術そのもののあり方や意味を統一的に研究する。例えば、音楽の、20世紀に生れたコンピュータ音楽やアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる作曲技法等、テクノロジーに支えられたメディア社会における「音楽」の新しい可能性や困難について具体的に考察する。その際、かつて「芸術」と呼ばれてきたものが、未来の社会において、また、芸術以外の専門分野とどのような関係にあるものなのかが研究の核心となる。

(山田晃嗣) 情報工学

社会における情報の価値が高まる中、それらを安全・安心に伝達するためのネットワークというインフラの存在と、情報の価値を高める分析手法（ソフトコンピューティング等）が注目されている。一方で、多様な価値観を持つ現代人が生きやすい情報化社会を目指すには、個の存在を認め、皆が共生できる環境が必要である。そこで各ユーザが個別対応するための一手段として情報技術を考える。情報技術をどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉えて情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方を探求していく。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表等、総合的に判断する。

博士後期課程履修モデル（基本）

科目区分	科目名	配当年次	単位	履修時期			学生の動き・教育研究の目標等
				1年次	2年次	3年次	
研究 基礎 科目	メディア表現研究Ⅰ	1前	2	→			・研究を進める上で必要となる基礎的な考え方を修得
	メディア表現研究Ⅱ	1後	2		→		・研究の基礎的な展開を修得
	知的財産権特論	1前	1	→			・研究を実務に活かす上で必要となる知識修得
	小計		5				
ブ ロ ジ ェ ク ト	プロジェクト研究Ⅰ	1後	2	→			・研究の社会との接点を探るための計画と実践
	プロジェクト研究Ⅱ	2前	2		→		・研究の社会との接点を探るための実践
	小計		4				
特 別 研 究 科 目	メディア表現特別研究Ⅰ	1通	2	→	→		・指導教員の決定 ・研究テーマの検討・決定 ・研究計画書審査会、倫理審査会での審査
	メディア表現特別研究Ⅱ	2通	2		→	→	・研究テーマの遂行 ・学会等への論文投稿、作品発表 ・中間審査発表会での発表
	メディア表現特別研究Ⅲ	3通	4			→	・博士論文、研究制作の作成 ・博士論文予備審査会 ・博士論文審査会
	小計		8				
合計			17				

博士後期課程履修モデル例1（メディア創出に関する研究の場合）

科目区分	科目名	配当年次	単位	履修時期			学生の動き・教育研究の目標等
				1年次	2年次	3年次	
研究基礎科目	メディア表現研究Ⅰ	1前	2	→			・研究を進める上で必要となる基礎的な考え方を修得
	メディア表現研究Ⅱ	1後	2		→		・メディアに関する研究法や実践方法などの知識を修得し、論文作成に求められる手順を理解する
	知的財産権特論	1前	1	→			・研究を実務に活かす上で必要となる知識修得
	小計		5				
プロジェクト	プロジェクト研究Ⅰ	1後	2		→		・メディア技術とそれがもたらす影響を主軸に、研究と社会との接点を探り、プロジェクトの企画から実践へ向かう
	プロジェクト研究Ⅱ	2前	2			→	・メディア技術に関する研究を進めるに際し、他者を巻き込みながらプロジェクトを実践する
	小計		4				
特別研究科目	メディア表現特別研究Ⅰ	1通	2	→			・指導教員の決定 ・研究テーマの検討・決定 ・研究計画書審査会、倫理審査会での審査
	メディア表現特別研究Ⅱ	2通	2			→	・研究テーマの遂行 ・学会等への論文投稿、作品発表 ・中間審査発表会での発表
	メディア表現特別研究Ⅲ	3通	4				→ ・博士論文、研究制作の作成 ・博士論文予備審査会 ・博士論文審査会
	小計		8				
合計			17				

博士後期課程履修モデル例2（視覚文化とメディアに関する研究の場合）

科目区分	科目名	配当年次	単位	履修時期			学生の動き・教育研究の目標等
				1年次	2年次	3年次	
研究基礎科目	メディア表現研究Ⅰ	1前	2	→			・研究を進める上で必要となる基礎的な考え方を修得
	メディア表現研究Ⅱ	1後	2		→		・視覚文化に関するメディア技術の研究法や実践方法などの知識を修得し、論文作成に求められる手順を理解する
	知的財産権特論	1前	1	→			・研究を実務に活かす上で必要となる知識修得
	小計		5				
プロジェクト科目	プロジェクト研究Ⅰ	1後	2	→			・視覚文化に関するメディア技術がもたらす影響について社会との接点を探り、プロジェクトを企画実践する
	プロジェクト研究Ⅱ	2前	2		→		・視覚文化に関するメディア技術がもたらす影響について、他者を巻き込みながらプロジェクトを実践する
	小計		4				
特別研究科目	メディア表現特別研究Ⅰ	1通	2	→			・指導教員の決定 ・研究テーマの検討・決定 ・研究計画書審査会、倫理審査会での審査
	メディア表現特別研究Ⅱ	2通	2		→		・研究テーマの遂行 ・学会等への論文投稿、作品発表 ・中間審査発表会での発表
	メディア表現特別研究Ⅲ	3通	4			→	・博士論文、研究制作の作成 ・博士論文予備審査会 ・博士論文審査会
	小計		8				
合計			17				

博士後期課程履修モデル（基本）

科目区分	科目名	配当年次	単位	履修時期			学生の動き・教育研究の目標等
				1年次	2年次	3年次	
研究基礎科目	メディア表現研究Ⅰ	1前	2	→			・研究を進める上で必要となる基礎的な考え方を修得
	メディア表現研究Ⅱ	1後	2		→		・研究の基礎的な展開を修得
	小計		4				
プロジェクト	プロジェクト研究Ⅰ	1後	2	→			・研究の社会との接点を探るための計画と実践
	プロジェクト研究Ⅱ	2前	2		→		・研究の社会との接点を探るための実践
	小計		4				
特別研究科目	メディア表現特別研究Ⅰ	1通	2	→	→		・指導教員の決定 ・研究テーマの検討・決定 ・研究計画書審査会、倫理審査会での審査
	メディア表現特別研究Ⅱ	2通	2		→	→	・研究テーマの遂行 ・学会等への論文投稿、作品発表 ・中間審査発表会での発表
	メディア表現特別研究Ⅲ	3通	4			→	・博士論文、研究制作の作成 ・博士論文予備審査会 ・博士論文審査会
	小計		8				
合計			16				

博士後期課程履修モデル例1（メディア創出に関する研究の場合）

科目区分	科目名	配当年次	単位	履修時期			学生の動き・教育研究の目標等
				1年次	2年次	3年次	
研究基礎科目	メディア表現研究Ⅰ	1前	2	→			・研究を進める上で必要となる基礎的な考え方を修得
	メディア表現研究Ⅱ	1後	2		→		・メディアに関する研究法や実践方法などの知識を修得し、論文作成に求められる手順を理解する
	小計		4				
プロジェクト	プロジェクト研究Ⅰ	1後	2	→			・メディア技術とそれがもたらす影響を主軸に、研究と社会との接点を探り、プロジェクトの企画から実践へ向かう
	プロジェクト研究Ⅱ	2前	2		→		・メディア技術に関する研究を進めるに際し、他者を巻き込みながらプロジェクトを実践する
	小計		4				
特別研究科目	メディア表現特別研究Ⅰ	1通	2	→			・指導教員の決定 ・研究テーマの検討・決定 ・研究計画書審査会、倫理審査会での審査
	メディア表現特別研究Ⅱ	2通	2		→		・研究テーマの遂行 ・学会等への論文投稿、作品発表 ・中間審査発表会での発表
	メディア表現特別研究Ⅲ	3通	4			→	・博士論文、研究制作の作成 ・博士論文予備審査会 ・博士論文審査会
	小計		8				
合計			16				

博士後期課程履修モデル例2（視覚文化とメディアに関する研究の場合）

科目区分	科目名	配当年次	単位	履修時期			学生の動き・教育研究の目標等	
				1年次	2年次	3年次		
研究基礎科目	メディア表現研究Ⅰ	1前	2	→			・研究を進める上で必要となる基礎的な考え方を修得	
	メディア表現研究Ⅱ	1後	2		→		・視覚文化に関するメディア技術の研究法や実践方法などの知識を修得し、論文作成に求められる手順を理解する	
	小計		4					
プロジェクト	プロジェクト研究Ⅰ	1後	2		→		・視覚文化に関するメディア技術がもたらす影響について社会との接点を探り、プロジェクトを企画実践する	
	プロジェクト研究Ⅱ	2前	2			→	・視覚文化に関するメディア技術がもたらす影響について、他者を巻き込みながらプロジェクトを実践する	
	小計		4					
特別研究科目	メディア表現特別研究Ⅰ	1通	2	→			・指導教員の決定 ・研究テーマの検討・決定 ・研究計画書審査会、倫理審査会での審査	
	メディア表現特別研究Ⅱ	2通	2			→	・研究テーマの遂行 ・学会等への論文投稿、作品発表 ・中間審査発表会での発表	
	メディア表現特別研究Ⅲ	3通	4				→	・博士論文、研究制作の作成 ・博士論文予備審査会 ・博士論文審査会
	小計		8					
合計			16					

博士後期課程「時間割」

前期

科目名	開講時期	教室	担当教員
メディア表現研究Ⅰ	月曜5限	講義室W	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
プロジェクト研究Ⅱ	金曜5限	担当教員によりこととなります。	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
知的財産権特論	金曜3・4限	講義室W	杉原長利

後期

科目名	開講時期	教室	担当教員
メディア表現研究Ⅱ	月曜5限	担当教員によりこととなります。	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
プロジェクト研究Ⅰ	金曜5限	担当教員によりこととなります。	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣

通年

科目名	開講時期	教室	担当教員
メディア表現特別研究Ⅰ	担当教員により異なります。		主指導教員
メディア表現特別研究Ⅱ			主指導教員
メディア表現特別研究Ⅲ			主指導教員

博士後期課程「時間割」

前期

科目名	開講時期	教室	担当教員
メディア表現研究Ⅰ	月曜5限	講義室W	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
プロジェクト研究Ⅱ	金曜5限	担当教員によりこととなります。	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣

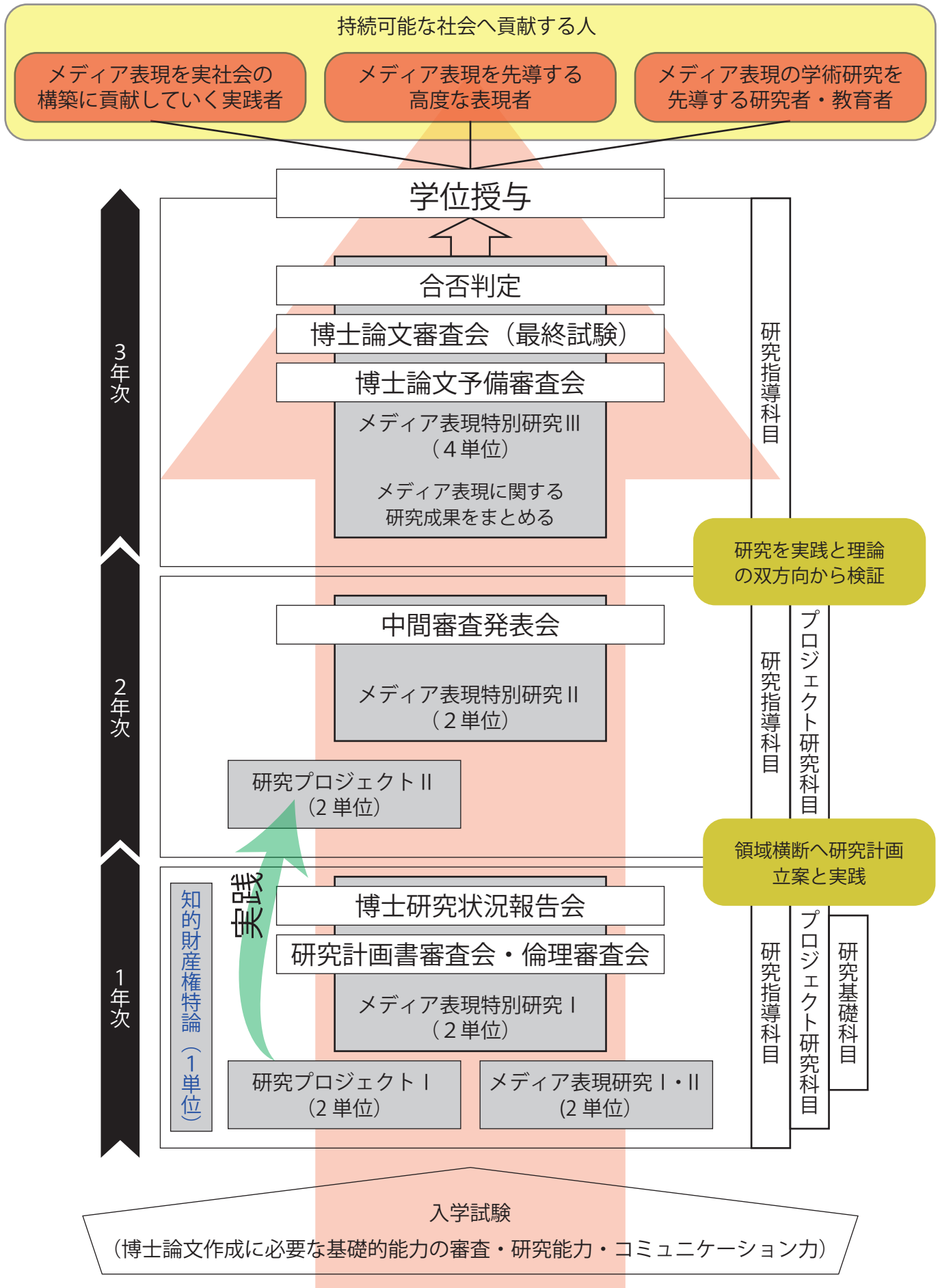
後期

科目名	開講時期	教室	担当教員
メディア表現研究Ⅱ	月曜5限	担当教員によりこととなります。	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣
プロジェクト研究Ⅰ	金曜5限	担当教員によりこととなります。	赤羽亨、赤松正行、伊村靖子、金山智子、桑久保亮太、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、平林真実、前田真二郎、松井茂、三輪眞弘、山田晃嗣

通年

科目名	開講時期	教室	担当教員
メディア表現特別研究Ⅰ	担当教員により異なります。		主指導教員
メディア表現特別研究Ⅱ			主指導教員
メディア表現特別研究Ⅲ			主指導教員

博士後期課程教育課程概念図



博士後期課程教育課程概念図

